

河内長野市遺跡調査会報XX

市町西遺跡

岩瀬北遺跡

汐の宮町南遺跡

2000年2月

河内長野市遺跡調査会

序 文

大阪府の南東部に位置する河内長野市は、市域を高野街道を初めとする街道が通り、南河内における交通の要衝として発展してきた街です。このため、市内には金剛寺、観心寺などの寺社に代表される重要文化財や、多くの埋蔵文化財が残されています。

このような河内長野市も、大阪市内への通勤圏に位置しているため、近年になって住宅都市として急速に開発が進んでいます。

開発がもたらす影響は自然や文化財にとって大きなものです。とくに埋蔵文化財にとっては直接的に関わってくるものとして大きな問題であります。

開発を必要とすると同時に、失われていく遺跡に託された先人達のメッセージを現在の市民、さらには未来の市民へと伝えていかなければなりません。

本書は河内長野市に存在する遺跡の発掘調査の成果を取録しています。先人達が残したメッセージの一部でも理解していただければ幸いです。

発掘調査に協力していただきました施主の方々の埋蔵文化財への深い御理解に末尾ながら謝意を表すものです。

平成12年2月

河内長野市遺跡調査会
理事長 福田 弘行

例 言

1. 本書は平成7～9年度に河内長野市遺跡調査会が実施した市内遺跡の発掘調査報告書である。調査にかかる費用は、市町西遺跡 I CW96-1 は株式会社ヤマイチハウジング、市町西遺跡 I CW96-3 は有限会社大阪土地建物、岩瀬北遺跡 I ZN97-1 は大阪府、汐の宮町南遺跡 S I S95-1 は古川真澄氏が負担した。
2. 調査は河内長野市教育委員会教育部社会教育課主幹尾谷雅彦・同課文化財保護係鳥羽正剛・同係嘱託中尾智行（現財団法人大阪府文化財調査研究センター）を担当者として実施し、内業調査は市立ふれあい考古館館長中西和子の指導のもとに行った。
3. 調査にかかる事務は、河内長野市遺跡調査会事務局長 濱田宗良（平成7・8年度、本市教育委員会教育部社会教育課課長補佐兼務）、大塚幸男（平成9～11年度、同）が主担した。
4. 本書の執筆は尾谷・鳥羽・中尾・太田宏明（本市教育委員会教育部社会教育課文化財保護係）が行い、編集は藤原哲（市立ふれあい考古館）・中村幸子が補佐した。文責については各報告文の文末に記載している。
5. 発掘調査及び内業整理については、下記の方々に参加を得た。（敬称略）
阿部園子・内田（川島）伸子・喜多順子・久保八重子・杉本祐子・高橋知佐子・田川富子・辻宏子・中村嘉彦・林和宏・藤井美佐子・折本裕子・松尾和代・牟田口京子・山上美幸・山田（重野）真紀
6. 発掘作業は株式会社アート・株式会社島田組・前田建設工業株式会社、航空測量は写真エンジニアリング株式会社・株式会社バスコが実施した。
7. 写真撮影は、遺構については尾谷・鳥羽・中尾・中西、遺物については中西が行った。
8. 本調査の記録はスライドフィルムなどでも保管されており、広く一般の方々に活用されることを望むものである。

凡 例

1. 本報告書に記載されている標高はTPを基準としている。
2. 土色は新版標準土色帖による。
3. 平面測量は国家座標第VI系による5mメッシュを基準に実施したものである。
4. 図中の北は座標北である。
5. 本書の遺構名は下記の略記号を用いた。なお、土釜埋納遺構については、従来、性格不明のためSXを使用してきたが、本書よりSOを略記号とする。
SB…掘立柱建物 SD…溝 SE…井戸 SK…土坑 SL…埋塞
SO…土釜埋納遺構 SP…遺物出土ピット SU…集石遺構 SX…その他
NV…自然流路・落ち込み
6. 遺構実測図の縮尺は、1/10・1/20・1/30・1/40・1/60・1/80・1/100・1/120・1/150である。
7. 遺物実測図の縮尺は、土器1/4・漆器1/4・石器2/3・金属製品1/3・銅銭原寸を基準としているが、遺物の状況により変えている。
8. 弥生土器・土師器・土師質土器・漆器の断面は白抜き、須恵器・瓦器・瓦質土器・須恵質土器・陶磁器の断面は黒塗り、金属製品の断面は斜線である。
9. 文中の瓦器境の型式分類は尾上実氏の和泉型瓦器境の編年、瓦質皿の型式分類は尾谷の天野山金剛寺編年、青磁の型式分類は森田勉氏の編年に基づくものである。なお、器種名については本調査会の表記によるものとする。
10. 遺物番号と写真図版の番号は一致する。

目 次

序文	
例言	
凡例	
目次	
挿図目次	
表目次	
図版目次	
第1章 市町西遺跡 ICW96-1	(鳥羽) 1
第1節 位置と環境	1
第2節 調査の結果	1
1 遺構と遺物	1
2 まとめ	3
第2章 市町西遺跡 ICW96-3	(中尾) 5
第1節 調査地の概略	5
第2節 調査成果	7
1 遺構	7
2 遺物	17
第3節 まとめ	19
第3章 岩瀬北遺跡 IZN97-1	(尾谷) 23
第1節 調査に至る経過	23
第2節 位置と環境	23
第3節 調査の結果	25
1 概略	25
2 層序	25
3 遺構と遺物	25
第4節 まとめ	34
1 調査の成果	34
2 観心寺荘下岩瀬郷	35
第4章 汐の宮町南遺跡 SIS95-1	(鳥羽・太田) 39
第1節 位置と環境	39
第2節 調査の結果	40
1 遺構	40
2 遺物	41
第3節 まとめ	49

挿 図 目 次

第1図	河内長野市遺跡分布図 (1/40000)	
	市町西遺跡 I C W96-1	
第2図	調査区位置図 (1/5000)	1
第3図	遺構配置図 (1/150) 及び出土遺物実測図	2
第4図	調査区土層断面実測図 (1/60)	3
	市町西遺跡 I C W96-3	
第5図	調査区位置図 (1/5000)	5
第6図	遺構配置模式図 (1/350)	5
第7図	調査区土層断面実測図 (1/60)	6
第8図	S B 1 遺構実測図 (1/80)	7
第9図	S B 2 出土遺物実測図	8
第10図	S B 2 遺構実測図 (1/80)	8
第11図	S B 3 遺構実測図 (1/80)	9
第12図	S B 4 遺構実測図 (1/80)	9
第13図	S B 4 出土遺物実測図	10
第14図	S D 1 出土遺物実測図	11
第15図	S E 1 出土遺物実測図	11
第16図	S E 1 遺構実測図 (1/40)	12
第17図	S K 1・2 出土遺物実測図	12
第18図	S K 3 出土遺物実測図	13
第19図	S K 4～7 出土遺物実測図	13
第20図	S K 7 土層断面実測図 (1/60)	13
第21図	S L 1 遺構実測図 (1/20) 及び出土遺物実測図	14
第22図	S O 1 遺構実測図 (1/20) 及び出土遺物実測図	15
第23図	S U 1 遺構実測図 (1/30)	15
第24図	S U 1 出土遺物実測図	16
第25図	N V 1 土層断面実測図 (1/60)	16
第26図	包含層出土遺物実測図	17
第27図	遺構配置図 (1/120)	21～22
	岩瀬北遺跡 I Z N97-1	
第28図	調査区位置図 (1/5000)	24
第29図	S B 1 遺構実測図 (1/80)	25

第30図	S B 2 遺構実測図 (1/80)	26
第31図	S B 3 遺構実測図 (1/80)	26
第32図	S B 3 出土遺物実測図	26
第33図	S D 1 出土遺物実測図	26
第34図	S D 2 遺構実測図 (1/120・1/40) 及び出土遺物実測図	27
第35図	S K 1・2・4 出土遺物実測図	29
第36図	S O 1 出土遺物実測図	30
第37図	S O 1 遺構実測図 (1/20)	31
第38図	S P 1～3 出土遺物実測図	31
第39図	S X 1 遺構実測図 (1/40)	31
第40図	S X 1 出土遺物実測図	32
第41図	S X 2 出土状況図 (1/10) 及び出土遺物実測図	32
第42図	包含層出土遺物実測図	33
第43図	包含層(上段南側谷堆積層)出土遺物実測図	34
第44図	主要遺構配置模式図 (1/250)	34
第45図	調査地周辺の小字地名図 (1/5000)	36
第46図	遺構配置図 (1/120) 及び調査区土層断面実測図 (1/60)	37～38
汐の宮町南遺跡 S I S 95-1		
第47図	調査区位置図 (1/5000)	39
第48図	調査区土層断面実測図 (1/60)	39
第49図	遺構配置図 (1/100)	40
第50図	N V 1 出土石器実測図	41
第51図	N V 1・包含層出土弥生土器実測図	42
第52図	N V 1 出土土師器実測図 (1)	43
第53図	N V 1 出土土師器実測図 (2)	44
第54図	包含層出土土師器実測図	46
第55図	N V 1 出土須恵器実測図	47
第56図	包含層出土須恵器実測図	48
第57図	S I S 98-1 出土弥生土器実測図	49

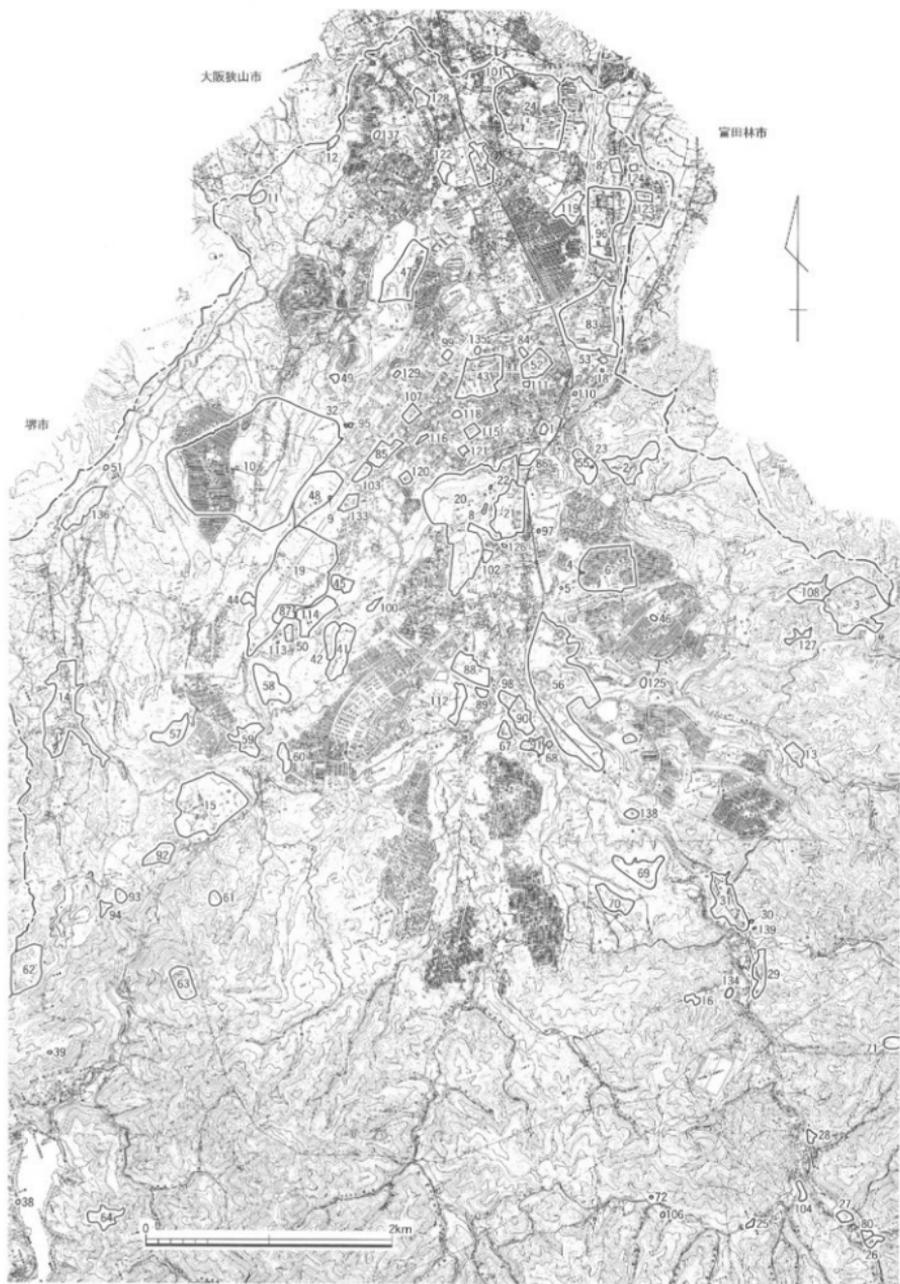
表 目 次

第1表 河内長野市遺跡地名表

図 版 目 次

- 図版1 遺構 I CW96-1 第1調査区全景(北から)、第2調査区全景(北から)
- 図版2 遺構 I CW96-3 調査区全景(西から)、SB1・2・3・4(南西から)
- 図版3 遺構 I CW96-3 SB1(北から)、SB2(東から)
- 図版4 遺構 I CW96-3 SB3(西から)、SB4(北から)
- 図版5 遺構 I CW96-3 SE1(南東から)、SK7(北西から)
- 図版6 遺構 I CW96-3 SO1(南西から)、SU1(南西から)
- 図版7 遺構 I ZN97-1 調査地前景(北から)、調査区上段全景(北から)
- 図版8 遺構 I ZN97-1 調査区上段全景(北西から)、調査区下段全景(北西から)
- 図版9 遺構 I ZN97-1 SB3・SD7・SD8・SK3(東から)、SB3柱穴
検出状況
- 図版10 遺構 I ZN97-1 SD1・SE1(北西から)、SD2・SE1(北東から)
- 図版11 遺構 I ZN97-1 SD2石垣部分(南西から)、SD10(東から)
- 図版12 遺構 I ZN97-1 SK1(南西から)、SK3(東から)
- 図版13 遺構 I ZN97-1 SO1、SP1(北から)
- 図版14 遺構 I ZN97-1 SX2遺物出土状況、銅銭出土状況(包含層)
- 図版15 遺構 SI S95-1 調査区全景(北から)、NV1遺物出土状況(北から)
- 図版16 遺物 I CW96-1 包含層(1~4)
I CW96-3 SB2(5)、SB4(6~12・14~24)、SD1(25)、
SE1(45~48)
- 図版17 遺物 I CW96-3 SE1(27~34・36~44)
- 図版18 遺物 I CW96-3 SE1(49・50)、SK1(54・55)、SK2(51)、
SK3(58~60・62~64・66~68)、SK4(71・72)
- 図版19 遺物 I CW96-3 SK1(53)、SK2(52)、SK3(56・57・61・65・69・
70)、SK4(77)、SK5(75)、SK6(73)、SK7
(74・76)、SL1(78・80)、SO1(81~86)
- 図版20 遺物 I CW96-3 SU1(87~91)、包含層(92~107)
I ZN97-1 SD1(109)、SD2(110~117)
- 図版21 遺物 I ZN97-1 SK1(118~121)、SK2(122)、SK4(123・124)、
SO1(125~140)
- 図版22 遺物 I ZN97-1 SB3(108)、SO1(141~150)、SP1(152)、SP
2(151)、SP3(153)、SX1(154・158・159・161・
162・164)

- 図版23 遺物 I Z N 97-1 S X 1 (155~157・163・165~168)、S X 2 (169~174)、
包含層 (175~200)
- 図版24 遺物 S I S 95-1 N V 1 (201・203・209~219・221~227・229~232・235
~240)、包含層 (202・204~208)
- 図版25 遺物 S I S 95-1 N V 1 (241~247)、包含層 (248~263)
- 図版26 遺物 S I S 95-1 N V 1 (264~285・287・288)
- 図版27 遺物 S I S 95-1 N V 1 (286・289~293)、包含層 (294~300)
S I S 98-1 確認調査 (301)



第1圖 河内長野市遺跡分布圖 (1/40000)

番号	遺跡名称	種類	時代	番号	遺跡名称	種類	時代
1	長野神社遺跡	社寺	室町以降	71	飯尾城跡	城跡	中世
2	河合寺遺跡	社寺	平安以降	72	葛城第16経塚	経塚	平安以降
3	観心寺遺跡	社寺	平安以降	(73)	葛城第18経塚	経塚	平安以降
4	大庭山古墳	古墳	古墳(前期)	(74)	葛城第10経塚	経塚	平安以降
5	大庭山古墳	古墳?	古墳(後期)	(75)	飯尾城跡	城跡	中世
6	大庭山古墳	集落・生産	弥生(後期)・平安	(76)	人形塚	塚	中世
7	興隆寺遺跡	社寺	中世以降	(77)	三田山経塚	経塚	平安以降
8	鳥帽子形八幡神社遺跡	社寺	室町以降	(78)	光澤寺遺跡	社寺	中世以降
9	塚崎古墳	古墳・墳墓	古墳(後期)・近世	(79)	鎌子城跡	城跡	中世
10	小田原1号古墳	墳墓	平安～近世	80	藤原神社遺跡	社寺	中世以降
11	小田原2号古墳	墳墓	奈良	(81)	川上神社遺跡	社寺	中世以降
12	延命寺遺跡	社寺	平安以降	82	平代御神社遺跡	社寺	中世以降
13	大野山金剛寺遺跡	社寺・墳墓	平安以降	83	向野遺跡	集落・生産	縄文・平安～近世
15	口野観音寺遺跡	社寺・生産	平安以降	84	吉野町遺跡	散布地	山世
16	地蔵寺遺跡	社寺	平安～中世	85	上原北遺跡	集落	中世
(17)	岩湖寺遺跡	社寺	中世以降	86	大日寺遺跡	社寺・古墳・墳墓	弥生～中世
18	五ノ木古墳	古墳(後期)	平安以降	87	向ノ嶽遺跡	散布地	縄文
19	高向遺跡	集落	旧石器～中世	88	小嶽遺跡	集落	縄文～中世
20	鳥帽子形城跡	城跡	中世～近世	89	加瀬遺跡	集落	古墳(後期)
21	喜多町遺跡	集落	縄文・古墳～中世	90	尾崎遺跡	集落	古墳～中世
22	鳥帽子形古墳	古墳(後期)	縄文	91	ジョウノマエ遺跡	城跡?	中世
23	木広空跡	生産	中世	92	仁平山城跡	城跡	中世
24	極谷遺跡	散布地	縄文～中世	93	夕ノラ城跡	城跡	中世
25	流谷八幡神社遺跡	社寺	平安以降	94	岩立城跡	城跡	中世
26	蟹井園神社遺跡	散布地	中世	95	上原近世瓦窯	生産	近世
27	蟹井園北遺跡	散布地	中世	96	市町東遺跡	散布地	弥生・中世
28	天見駅北方遺跡	散布地	中世	97	上田町高跡	石塚	古墳
29	千早口駅南遺跡	社寺	中世	98	尾崎北遺跡	集落	山世
30	岩瀬園寺遺跡	社寺	中世以降	99	西之山町遺跡	散布地	平安
31	留水遺跡	散布地	中世	100	野間里遺跡	集落	山世
32	伝仲真廟・古墳	古墳?		101	鴨尾遺跡	散布地	山世
(33)	富村地蔵堂跡	社寺	近世	102	上田町遺跡	散布地	古墳・中世
(34)	滝畑塚墓	墳墓	近世	103	上原中遺跡	古墳	中世
(35)	中村阿弥陀堂跡	社寺	近世	104	小野塚遺跡	墳墓	中世
(36)	東の村阿弥陀堂跡	社寺	近世	(105)	葛城第17経塚	経塚	平安以降
(37)	西の村阿弥陀堂跡	社寺	近世	106	薬師堂跡	社寺	中世以降
(38)	清水阿弥陀堂跡	社寺	近世	107	野作遺跡	生産	中世
39	滝区弥勒堂跡	社寺	近世	108	寺元遺跡	集落・社寺	奈良・中世
(40)	宮の下内墓	墳墓	古墳	(109)	鳩原遺跡	散布地	中世
41	宮山古墳	古墳	古墳	110	法師塚古墳跡	古墳	古墳
42	宮山遺跡	墳墓	縄文・奈良	111	山上露山古墳跡	古墳	古墳
43	西代藩陣屋跡	散布地・城跡	飛鳥～奈良・江戸	112	西河遺跡	集落	古墳・中世・近世
44	上原町遺跡	墳墓	近世	113	地福寺跡	社寺	近世
45	惣持寺跡	散布地・社寺	縄文・奈良・鎌倉	114	宮の下遺跡	集落	平安～中世
46	栗山遺跡	社寺	中世～近世	115	栗町遺跡	散布地	弥生・古墳・中世
47	寺ヶ瀬遺跡	散布地	縄文	116	綿町遺跡	散布地	中世
48	上原遺跡	散布地	旧石器～近世	(117)	太才遺跡	散布地	縄文・中世
49	住吉神社遺跡	社寺	近世以降	118	綿町北遺跡	集落	弥生・中世・近世
50	高向神社遺跡	社寺	中世以降	119	市町西遺跡	集落	縄文・中世
51	青が原神社遺跡	社寺	中世以降	120	栗町南遺跡	集落	中世
52	桶所藩代官所跡	城館	江戸	121	栗町東遺跡	散布地	弥生・中世
53	又子塚古墳跡	古墳	古墳	122	桶町東遺跡	散布地	弥生
54	麩子尻遺跡	散布地・社寺	縄文～近世	123	汐の宮町南遺跡	散布地	弥生・奈良
55	河合寺城跡	城館	中世	124	汐の宮町東遺跡	散布地	中世
56	三日月遺跡	集落・古墳地	旧石器～近世	125	神ガ丘近世墓	墳墓	近世
57	口の谷城跡	城館	中世	126	増福寺遺跡	社寺	平安以降
58	高木遺跡	散布地	縄文	127	三味城遺跡	墳墓・城館	中世・近世
59	汐の山城跡	城館	中世	128	松林寺遺跡	社寺	近世以降
60	峰山城跡	城館	中世	129	昭栄町西遺跡	散布地	中世
61	桶倉山城跡	城館	中世	*130	東高野街道	街道	平安以降
62	園見城跡	城館	中世	*131	西高野街道	街道	平安以降
63	旗蔵城跡	城館	中世	*132	高野街道	街道	平安以降
64	権現城跡	城館	中世	133	上原東遺跡	散布地	弥生・中世・近世
(65)	天神社遺跡	社寺	中世以降	134	池蔵寺東方遺跡	墳墓	鎌倉
(66)	葛城第15経塚	経塚	平安以降	135	本多町北遺跡	散布地	中世
67	加賀田神社遺跡	社寺	中世以降	136	下里町遺跡	散布地	古墳・中世
68	庚申堂遺跡	社寺	中世以降	137	あかしあ台遺跡	散布地	中世
69	石広城跡	城館	中世	138	首瀬北遺跡	集落	近世
70	佐武城跡	城館	中世	139	若瀬近世墓地	墳墓	近世

() は地図範囲外 * は街道につき地図上にプロットせず

第1表 河内長野市遺跡地名表

第1章 市町西遺跡 ICW96-1

第1節 位置と環境

当該遺跡は、岩湧山系を水源とする石川の左岸の中段段丘上に位置し、当該調査区は市町948番地他に所在する。標高は約110mである。

北側0.4kmには縄文時代から中世の散布地である塩谷遺跡が位置し、東側には弥生時代及び中世の複合遺跡である市町東遺跡が近接している。

本次調査は宅地造成に伴う事前調査として実施した。



第2図 調査区位置図 (1/5000)

第2節 調査の結果

1 遺構と遺物

調査区は2カ所を設定した。調査面積は第1調査区約66㎡、第2調査区約90㎡である。基本層序は、現地表面から①盛土、②耕土、③明黄褐色粘土、④浅黄色細砂、⑤にぶい黄色細砂、⑦明黄褐色細砂、⑧褐灰色粗砂混じり粘土であった。(第4図)

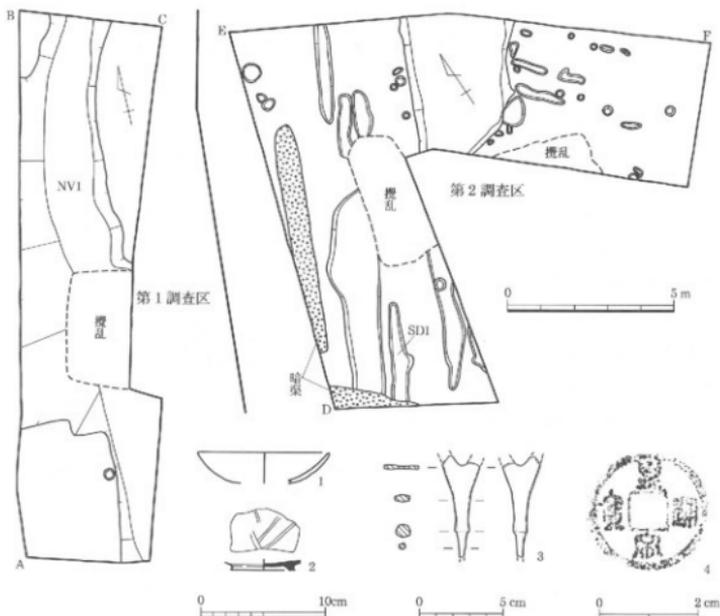
遺構は第1調査区から自然流路、ピット、第2調査区から溝、土坑、ピット、暗渠を検出した。溝と自然流路からは遺物が出土した。

(1) 溝

[SD1]

SD1は第2調査区の南側に位置する。溝の南端が暗渠に切られているため、詳細は不明である。規模は、検出長3.05m、検出幅0.28~0.65m、深さ0.04mを測る。軸方向はN-28°-Eである。

遺物は土師質土器の皿・碗、瓦器碗、瓦質土器の土釜が出土したが、細片のため実測できなかった。



第3図 遺構配置図(1/150)及び出土遺物実測図

(2) 自然流路

[NV1]

NV1は第1調査区のほとんどを占める。遺構の大半が調査区外にのびるため、詳細は不明である。周辺地形と遺構底部の傾斜から、北から南へと流れていたことがわかった。規模は検出長17m、最小幅1.4m、深さ0.29mを測る。

遺物は土師質土器の皿、瓦器塊、須恵質土器の練鉢が出土したが、細片のため実測できなかった。

(3) 包含層(第3図、図版16)

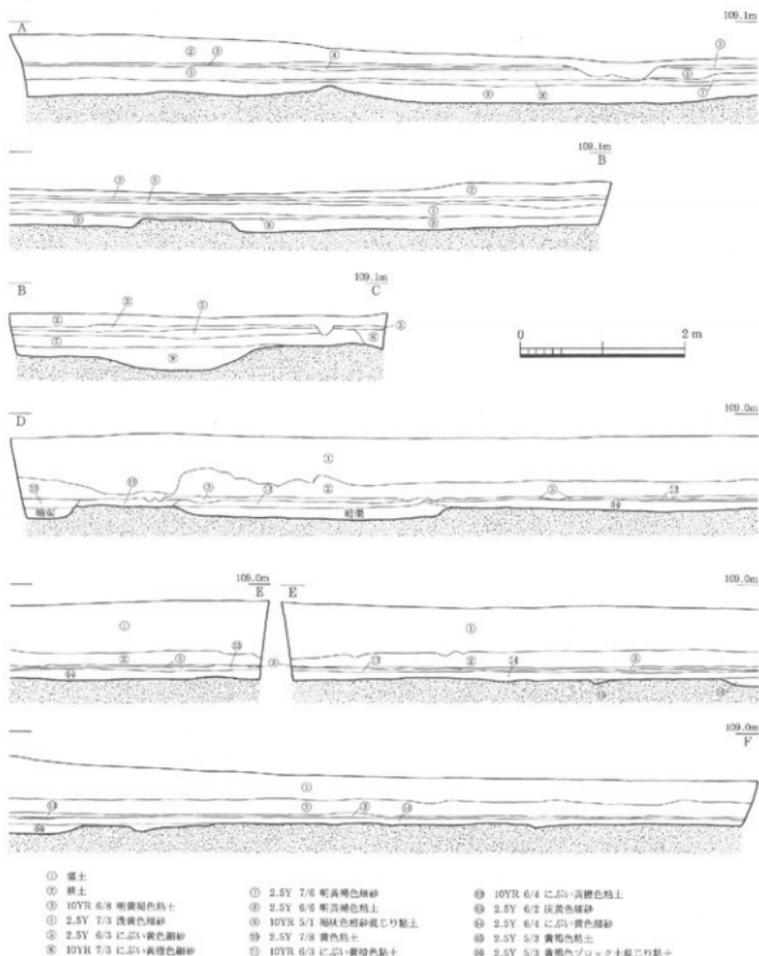
第1調査区包含層からは、サヌカイトの剥片、白磁、染付磁器が出土したが、細片のため実測できなかった。

第2調査区包含層からは、土師質土器の碗(1)、瓦器塊(2)、瓦質土器の上釜・甕、須恵質土器の練鉢、青磁皿、埴蓮弁青磁碗、肥前系染付磁器碗、瀬戸美濃おろし皿、鉄製雁股の矢(3)、北宋銭の皇宋通宝(4、初鋳1039年)が出土した。

2 まとめ

調査の結果、第2調査区においてピットを検出したが、建物の復元はできなかった。しかし、検出されたSD1のほかにも同軸方向の溝が数本検出されたことから、これらは何らかの規制をうけた平安時代後期から鎌倉時代前半にかけての遺構と見られる。

(鳥羽)



第4図 調査区土層断面実測図 (1/60)

第2章 市町西遺跡 ICW96-3

第1節 調査地の概略

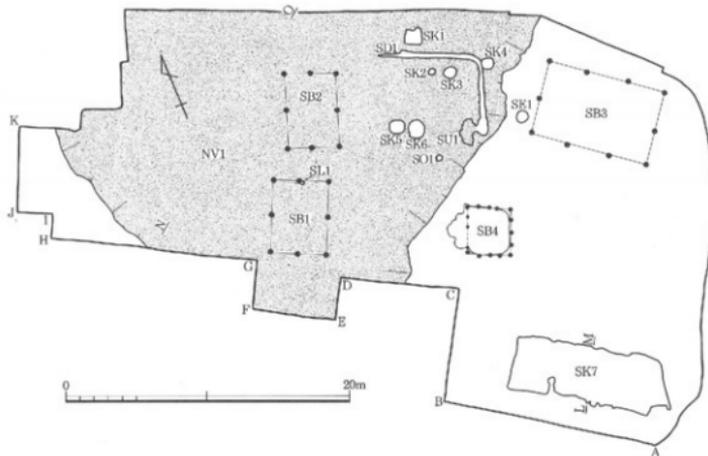
当該遺跡は石川の西側に形成された段丘上に位置する。段丘は比較的大きい高低差を持って西から東へと傾斜し、小規模な段丘崖を持つ。遺跡が位置するのは段丘の中ほどで、東側の段丘崖までが遺跡範囲となる。石川に向かって段丘を下ると市町東遺跡・汐の宮町南遺跡がある。

本次調査は分譲住宅建設に伴う事前調査として実施し、当該遺跡東端の段丘崖縁辺部に約1000㎡の調査区を設定して行った。調査区は市町945番地他に位置する。

基本層序は上から①耕土、②床土、③にぶい黄色粘土、④明黄褐色粘土となっており地山は黄色粘土であった。(第7図)

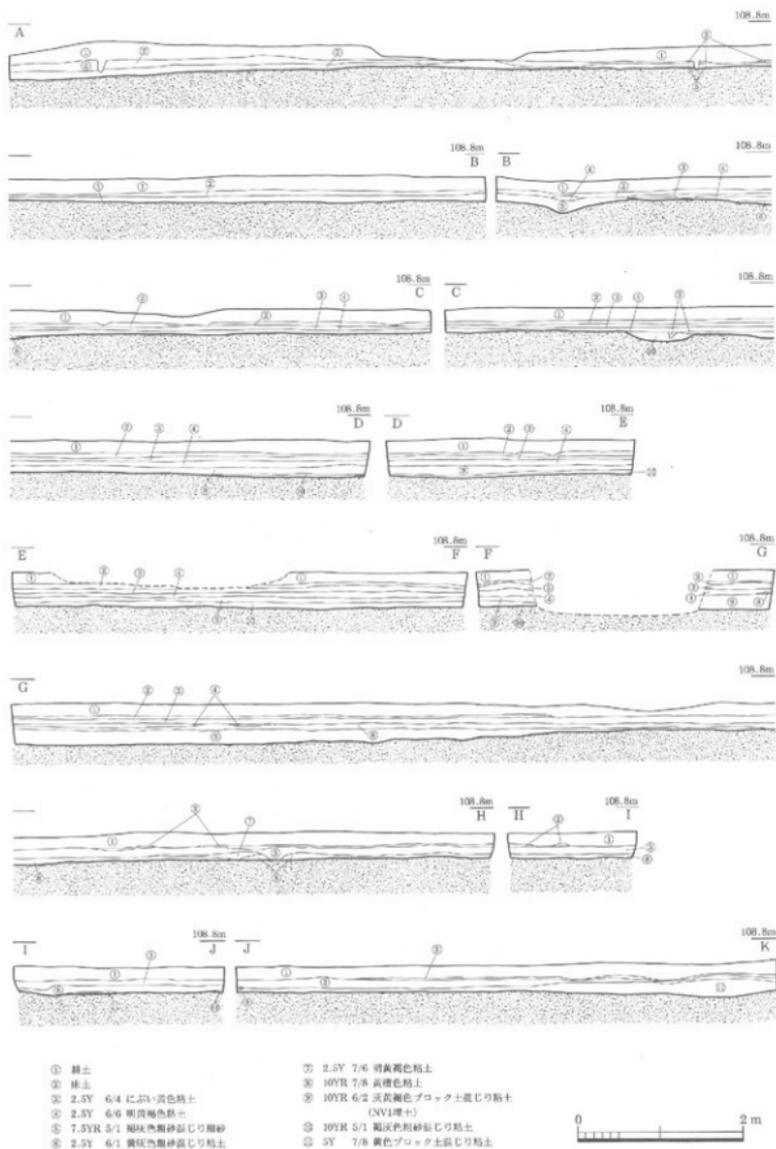


第5図 調査区位置図 (1/5000)



第6図 遺構配置模式図 (1/350)

市町西遺跡



第7図 調査区土層断面実測図 (1/60)

第2節 調査成果

1 遺構

本次調査では建物、井戸、溝など生活空間の諸要素が検出された。SB4やSO1など性格が不明なものもあるが、それについては後に詳述する。

なお、検出された遺構群は後世の耕作により上面が削平されているものが多い。したがって規模における深さは「残存している深さ」である。

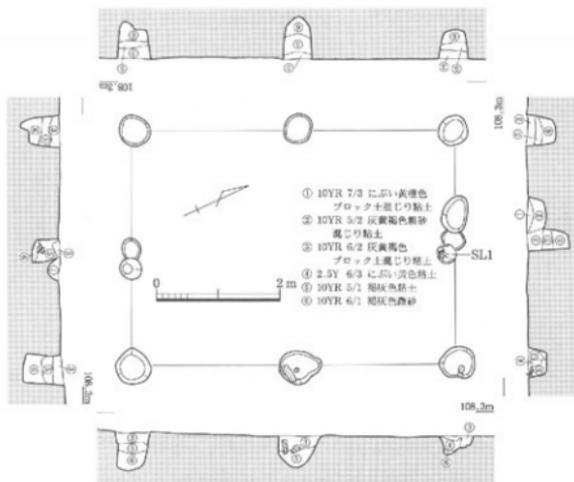
(1) 掘立柱建物

4棟の掘立柱建物が検出された。SB1及びSB2は主軸、規模ともに近似し、隣接していることから同時期に存在していたことは確実視される。SB4も主軸を同じくするが、SB3のみ異なった主軸を持つ。

また、これら建物付近には礎石と思われる扁平な川原石が見られ、掘立柱建物から礎石建物に建て替えを行った可能性を考えることができる。しかし、川原石が規則的な並びを見せるようなところは確認できなかった。

[SB1] (第8図、図版2・3)

SB1は調査区の中央付近で南北に並ぶ2つの掘立柱建物のうち、南側の建物である。



第8図 SB1遺構実測図 (1/80)

建物の規模は桁行2間(5.22m)×梁行2間(3.88m)を測る。柱間は桁行が約2.6m、梁行が約1.4~2.4mである。柱穴の深さは0.3~0.7mであった。主軸方向はN-25°-Eを示す。

柱穴からサヌカイトの剝片、土師質土器、瓦器が出土したが、細片のため実測できなかった。

南北の梁行中央の柱穴に重なって新しい柱穴が掘られている。これらは改築などの際に梁行中央の柱位置を移動させたものである可能性がある。また、北側梁行中央の柱穴に一部重なって瓦質土が出土したが、これについてはSL1として後述する。

[SB2] (第9・10図、図版2・3・16)

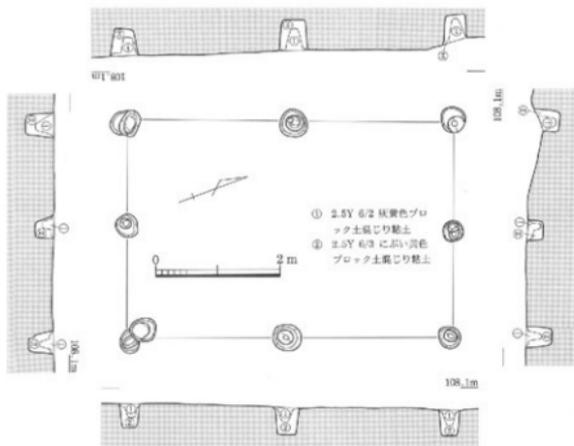
SB2はSB1の北側に隣接する掘立柱建物である。建物の規模は桁行2間(5.3m)×梁行2間(3.6m)を測る。柱間は桁行が約2.6m、梁行が約1.8mである。柱穴の深さは0.25~0.51mであった。主軸方向はN-20°-Eを示す。

南側梁行の両端の柱穴に重なって、北寄りに新しい柱穴が掘られている。これは建物の建て替え・修理に伴うものと考えられ、他の柱穴とは違い根石が入れられている。検出面から根石までの深さは約0.1mである。

南東隅の柱穴より瓦器皿(5)が出土した。



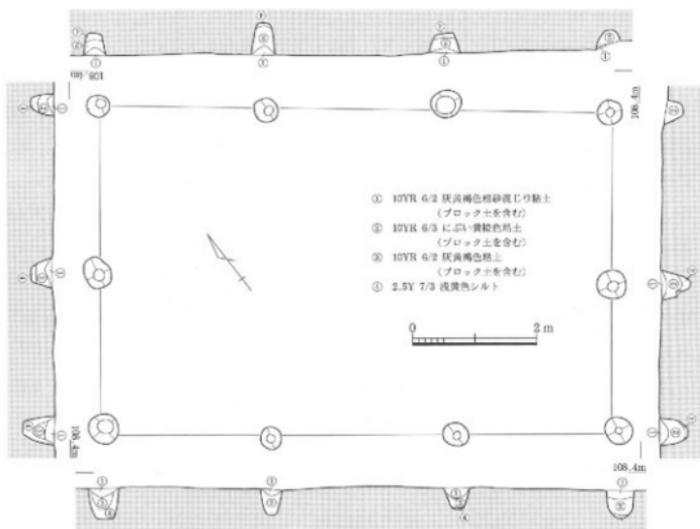
第9図 SB2出土遺物実測図



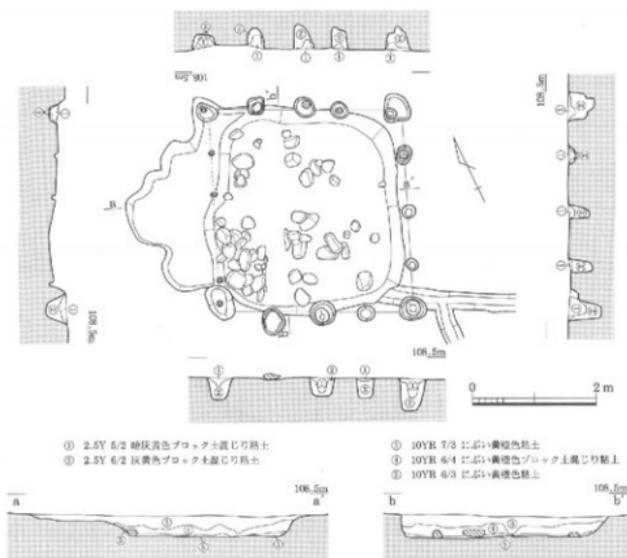
第10図 SB2遺構実測図(1/80)

[SB3] (第11図、図版2・4)

SB3は調査区北東隅で検出された掘立柱建物である。建物の規模は桁行3間(8.2m)×梁行2間(5.35m)を測る。柱間は桁行が約2.7m、梁行が約2.4~2.9mである。柱穴の深さは0.29~0.53mであった。主軸方向はN-52°-Wを示す。この主軸は他の建物や溝



第11図 SB 3 遺構実測図 (1/80)



第12図 SB 4 遺構実測図 (1/80)

とは明らかに違う。

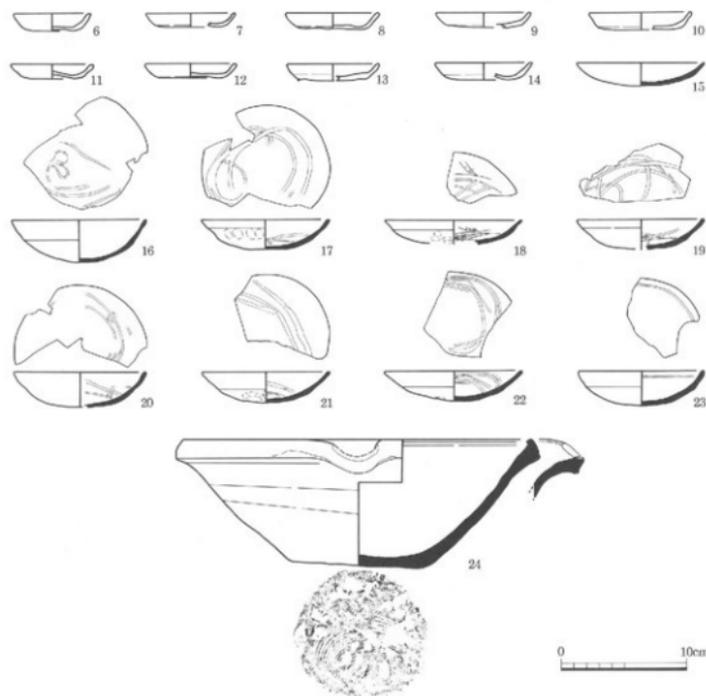
柱穴から土師質土器が出土したが、細片のため実測できなかった。

[SB4] (第12・13図、図版2・4・16)

SB4は調査区中央南東側で検出された掘立柱建物である。方形の掘り込み土坑の周囲に柱穴が検出された。しかし、建物西側の一边は柱穴列が検出されなかった。本来、柱穴のある位置に杭痕が列になって検出されたが、この遺構に伴うものかは明確ではない。また、これも確実にこの遺構に伴うとは言えないが、掘り込み土坑の南東隅から南東方向に細い溝が伸びる。この溝の底は掘り込み土坑の底より0.1~0.2mほど高くなる。

建物の規模は桁行4間(3.25m)×梁行4間(3.05m)を測る。柱間は桁行が0.72~0.92m、梁行が0.52~0.87mである。柱穴の深さは0.12~0.53mであった。桁行方向はN-22°-Eを示す。

遺物は東隅の柱穴より瓦器塊(16)が、掘り込み土坑内より土師質皿(6~14)、瓦質皿(15)、瓦器塊(17~23)、須恵質練鉢(24)が出土した。



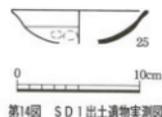
第13図 SB4出土遺物実測図

(2) 溝

〔SD1〕(第14図、図版16)

SD1は調査区北側中央に位置する。直角に折れ曲がった「逆くの字」形の溝である。一边は南東から北西方向、もう一边は南西から北東方向に伸びる。流方向は分からない。また、遺構の南端は集石遺構SU1に連結する。規模は長さ12.88m、幅0.34m、深さ0.1mを測る。

遺物は瓦器境(25)が実測できた。

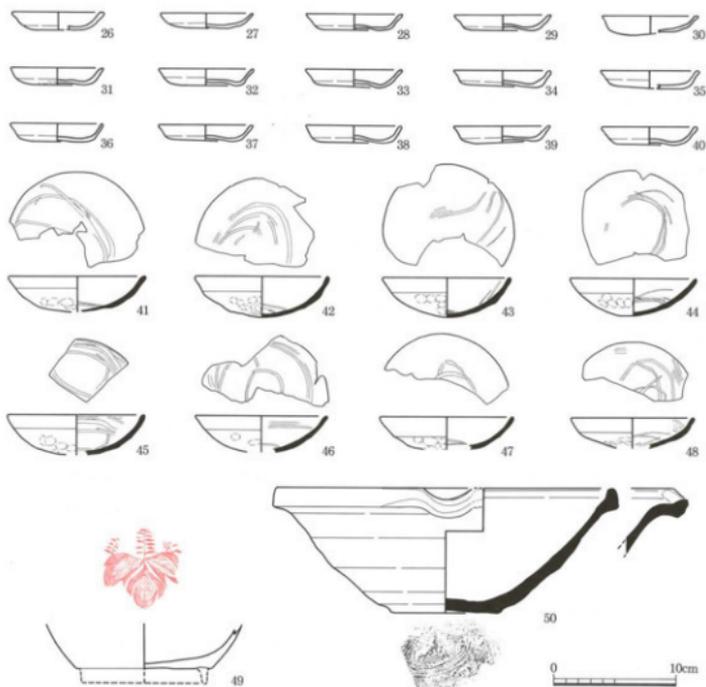


第14図 SD1出土遺物実測図

(3) 井戸

〔SE1〕(第15・16図、図版5・16~18)

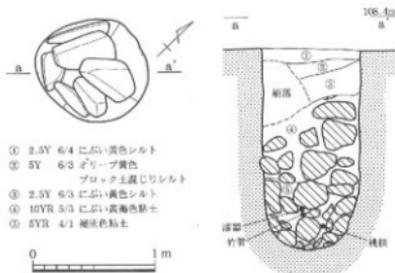
SE1はSB3の西側に隣接する。円形で川原石を積んだ石組井戸であったと考えられるが、井戸廃棄時に上方の石組は破壊され、井戸の埋め戻しに使用されたと考えられる。規模は径0.81m、深さ1.66mを測る。



第15図 SE1出土遺物実測図

底から1.2mまでは川原石が充填されていたが、その間に比較的残りのいい土器が多く見られた。また、底近くでは竹管や桃核と考えられる種子、漆器が出土しており、井戸廃棄時に何らかの祭祀を行った可能性が高い。

遺物は土師質皿(26~40)、瓦器埴(41~48)、須恵質練鉢(50)、漆器碗(49)が実測できた。



第16図 SE 1 遺構実測図 (1/40)

この井戸については調査の最終日において、土木重機による断ち割りを行って調査したもので、興味深い遺物が出土しているにもかかわらず、十分な知見を得ることができなかった。

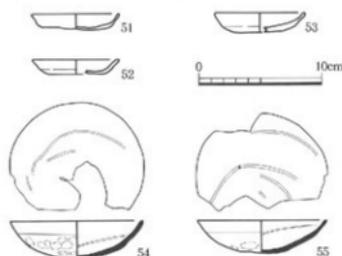
(4) 土坑

土坑はSK 1~6までが調査区の北側中央部にまとまって位置している。これらの性格は不明であるが、数の差こそあるものの全ての土坑に比較的残りのいい土器が入っていることから、後述する土釜埋納遺構と併せて祭祀性のある性格を考慮することができるかもしれない。

[SK 1] (第17図、図版18・19)

SK 1はSD 1の北側に位置する隅丸方形の土坑で、南側の一辺はSD 1に平行する。規模は長辺1.26m、短辺1.1m、深さ0.34mを測る。

遺物は土師質皿(53)と瓦器埴(54・55)が実測できた。



第17図 SK 1・2 出土遺物実測図

[SK 2] (第17図、図版18・19)

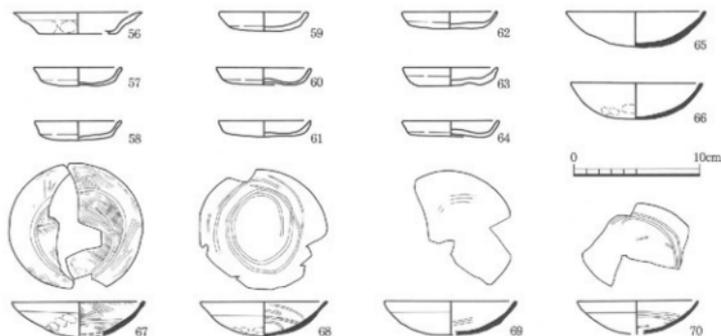
SK 2はSD 1の南側に位置する円形の土坑である。規模は径0.54m、深さ0.36mを測る。

遺物は土師質皿(51・52)が実測できた。

[SK 3] (第18図、図版18・19)

SK 3はSD 1の南側、SK 2の東側に位置する円形の土坑である。規模は径0.96m、深さ0.4mを測る。

遺物は比較的多く、土師質皿(56~64)と瓦器埴(65~70)が実測できた。



第18図 SK 3 出土遺物実測図

[SK 4] (第19図、図版18・19)

SK 4はSD 1の「逆くの字」状に折れ曲がった東側に隣接する隅丸方形の土坑である。規模は長辺0.91m、短辺0.83m、深さ0.15mを測る。

遺物は瓦器境(71・72)と須恵質練鉢(77)が実測できた。

[SK 5] (第19図、図版19)

SK 5は調査区中央に位置する隅丸方形の土坑である。規模は長辺1.1m、短辺0.9m、深さ0.25mを測る。

遺物は鉄釘(75)が実測できた。

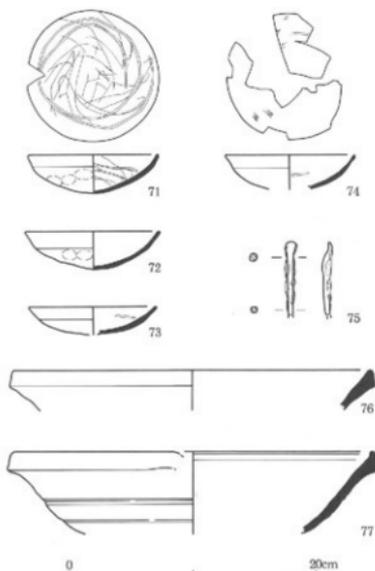
[SK 6] (第19図、図版19)

SK 6はSK 5の東側に隣接する楕円形の土坑である。規模は長径1.38m、短径1.16m、深さ0.28mを測る。

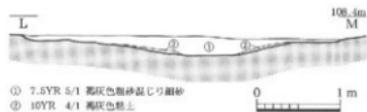
遺物は瓦器境(73)が実測できた。

[SK 7] (第19・20図、図版5・19)

SK 7は調査区南東隅に位置する。これはSK 1～6までの土坑とは明らかに違う性格を持つもので、「土坑」よりも「掘り込み」・「落ち込み」などの名称が適当であるかもしれない。平



第19図 SK 4～7 出土遺物実測図



第20図 SK 7 土層断面実測図 (1/60)

面形は長方形で、残存している長辺は10.7m、短辺は4.2m、深さは0.2mを測る。

遺物は瓦器塊(74)と須恵質練鉢(76)が実測できた。

この遺構の性格については、その規模の大きさから何らかの耕作作業に伴うものである可能性が考えられる。

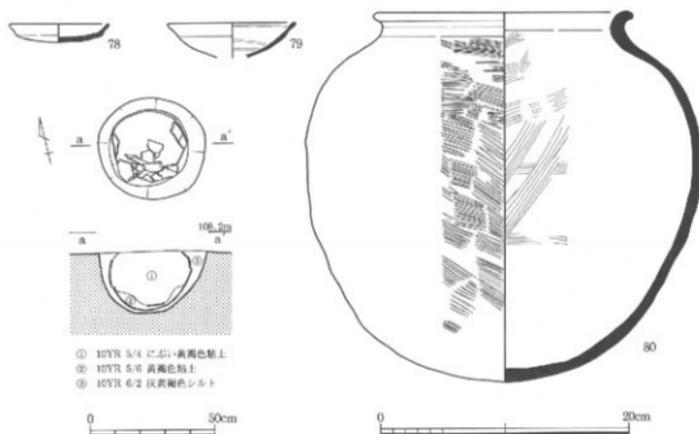
(5) 埋甕

[S L 1] (第21図、図版19)

S L 1はS B 1の北側中央の柱穴に一部重なる形で出土した。検出した段階で頸部より上は破損しており、体部内の埋土の上に落ちこんでいた。後世の耕作により削られたものと考えられる。遺構名称として「埋甕」としたが、明確な掘形は検出されず、建物内に据えるような「置甕」である可能性も考えられる。

この遺構の性格と使用時期については明確でないが、S B 1廃絶後に設置された可能性が高いと考えられる。しかし、先に述べたように、S B 1の梁行中央の柱穴は建て替えもしくは修理などの際に移動している可能性があるため、S B 1内に据えられた甕である可能性もある。甕の年代観は14世紀中～後半頃におくことができると考えられ、他の遺物と変わらないため、S B 1廃絶後の設置としても大きな時期差は無いものと考えられる。

遺物は瓦器皿(78)・塊(79)、瓦質甕(80)が実測できた。

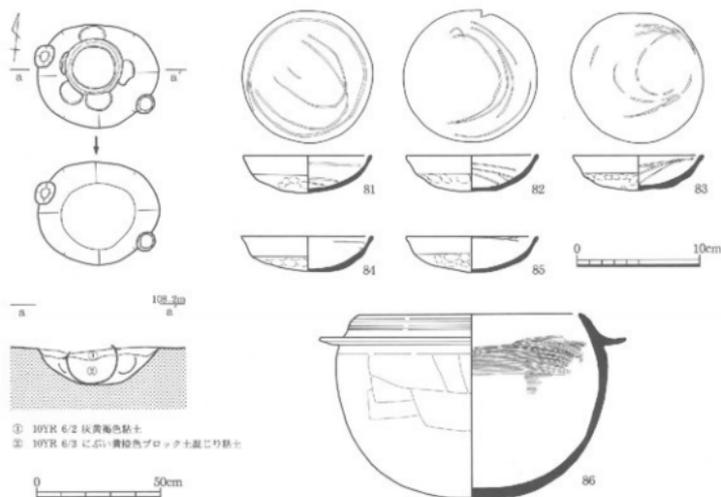


第21図 S L 1 遺構実測図 (1/20) 及び出土遺物実測図

(6) 土釜埋納遺構

[S O 1] (第22図、図版6・19)

S O 1はS U 1の南西、S K 6の南側で検出された。円形の土坑で内部には瓦質の土釜



第22図 S O I 遺構実測図 (1/20) 及び出土遺物実測図

が正置されていた。土釜の周囲には見込みを内側に向けて、5点の瓦器塊が放射状に配置されていた。土坑の規模は径0.48m、深さ0.15mを測る。土釜内の埋土からは何も見つからなかった。

遺物は土釜(86)、瓦器塊(81~85)ともに良好に残存しており、全て実測できた。

このように土釜と皿・碗を組み合わせて埋納する遺構は、現在までに30数例が知られている。そのうちの半数以上が当市域と北方に隣接する富田林市等で出土しており、南河内地域特有の祭祀跡である可能性がある。

また、蔵骨器である可能性も考えてみたが、中世において土釜を蔵骨器に使用する例では皿が蓋として伴うものはあるものの、5点の皿(碗)が伴う例はない。当市域では蔵骨器に使用するような例は見られないため、可能性は低いと考えられる。

(7) 集石遺構

[SU1] (第23・24図、図版6・20)

SU1はSD1の南側に連結する。平面形は不定形

を呈し、長軸1.77m、短軸0.93m、深さ0.14mを測る。



第23図 SU1 遺構実測図 (1/30)

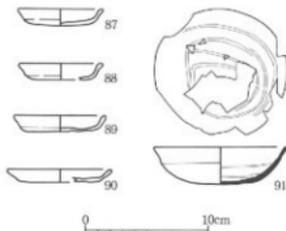
内部には川原石が充填されていた。

遺物は土師質皿(87~90)と瓦器碗(91)が実測できた。

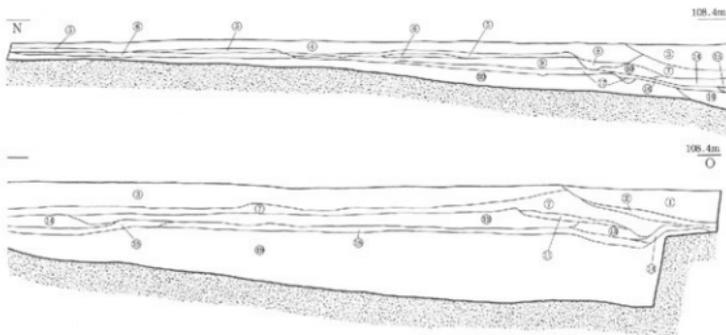
(8) 落ち込み

[NV 1] (第25図)

NV 1は調査区西半で検出された。北に向かって傾斜する円弧状の落ち込みである。肩部と北側最深部との比高差は約1.5mに及ぶ。SB 2やSD 1などの遺構は⑨層上面で検出された。それより下層は自然堆積層の可能性が強く、河岸段丘上の落ち込みが自然営力により埋没した後に中世の生活面が形成されたと考えられる。⑨層はその際の整地層とも考えることができる。



第24図 SU 1出土遺物実測図

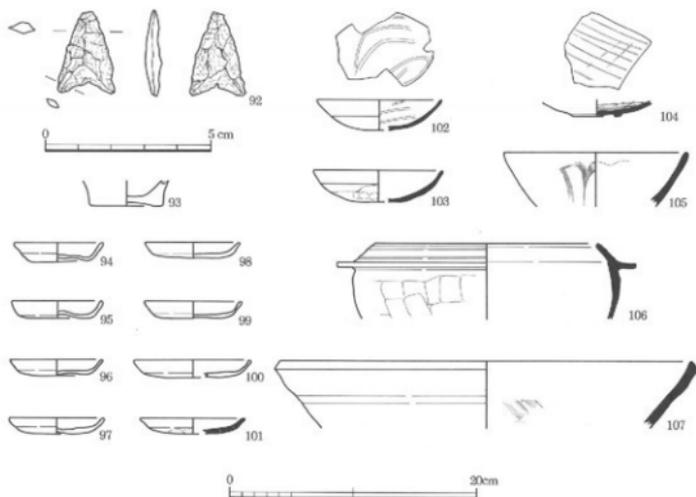


- | | | |
|-----------------------------------|-------------------------------|-------------------------------|
| ① 10YR 6/3 練製じり粘土(蓋土) | ④ 10YR 5/4 にぶい黄褐色粘土 | ⑦ 10YR 5/3 にぶい黄褐色粘土 |
| ② 10YR 6/7 褐色粘土 | ⑤ 7.5YR 4/4 褐色粘土(上面にマンガン酸が偏集) | ⑧ 7.5YR 5/4 にぶい褐色粘土 |
| ③ 10YR 6/8 明黄褐色ブロック土混じり粘土(包含層) | ⑥ 10YR 5/2 灰黄褐色粘土 | ⑨ 2.5Y 5/1 黄灰色粘土(上面にマンガン酸が偏集) |
| ⑩ 10YR 6/2 灰黄褐色ブロック土混じり粘土(=第7図参照) | ⑪ 10YR 8/8 黄褐色粘土 | |
| ⑫ 10YR 5/6 黄褐色粘土 | ⑬ 7.5YR 5/6 明褐色粘土 | |
| ⑬ 10YR 5/4 にぶい黄褐色ブロック土混じり粘土 | ⑭ 2.5Y 7/4 灰黄色練製じり粘土 | |
| ⑭ 7.5YR 5/2 灰褐色粘土 | ⑮ 10YR 6/6 明黄褐色粘土 | |
| | ⑯ 2.5Y 5/2 練製黄褐色ブロック土混じり粘土 | |
| | ⑰ 10YR 6/4 にぶい黄褐色粘土 | |

第25図 NV 1土層断面実測図 (1/60)

(9) 包含層(第26図、図版20)

包含層からは、ササカイトの石織(92)、弥生土器(93)、須恵器、黒色土器、土師質皿(94~100)、瓦器皿(101)・碗(102~104)、瓦質土釜(106)・練鉢(107)、須恵質土器、青磁碗(105)、瓦が出土した。



第26図 包含層出土遺物実測図

2 遺物

本次調査においては遺構や包含層から比較的多くの遺物の出土を見た。遺構から出土した遺物は、ほとんど全てが14世紀中～後半頃のものと考えることができる。包含層から出土したものには石織や弥生土器などがある。ここでは遺構から出土した遺物に若干の検討を加える。

遺構から出土している遺物には、土師質皿、瓦器碗、瓦器皿、瓦質皿、瓦質土釜、瓦質甕、須恵質練鉢、漆器碗がある。

土師質皿 ほとんど全てが同じ型式であるが、1点だけ違うものがある。

大半の皿は底部から外上方に伸びる口縁部を一単位でヨコナデし、仕上げたものである。底部内面は比較的丁寧にナデ仕上げするが、外面は粗くナデを施すのみであるため、指頭圧痕が顕著に見られる。底部を平坦に仕上げるものと、ヘソ皿状に中央部が盛り上がるものとに細分することができる。胎土は粗い。

1点だけ異なる型式の皿はSK3出土の(56)である。底部から外上方に伸びる口縁部外面の上半部をヨコナデする。下半部はナデしているものの指頭圧痕が残る程度の仕上げがりがだが、内面は指頭圧痕が消えるまで丁寧にナデしている。胎土は細かい。

瓦器碗 ほとんど全ての遺構で出土している。ミガキは粗く、見込みまで連続して施す。

高台は付かない。

法量分布、調整の面から見てほとんど型式差が見られない。和泉型瓦器塚の尾上編年にあてると最も新しいⅣ-4もしくはⅣ-5期にあたるものであると思われる。近年、森島の研究によって和泉型瓦器塚の暦年代が少し遡り、先の瓦器塚の形式は14世紀前半～中頃という年代観を与えられた(註1)。

しかし、和泉型瓦器塚は比較的在地性の強い瓦器塚と考えられており、類似の形式でも併行関係がずれる事があると考えることができる。当市域には天野山金剛寺遺跡という寺院跡があるが、ここで出土した瓦器塚と他器種の共伴遺物との関係を見た場合、瓦器塚の廃絶は半世紀ほど下がる可能性が考えられる。

他にも当市では他の地域で瓦器塚が廃絶した後も、その系譜を引く小皿状の瓦器(瓦質皿)が存続するという地域性が認められる。

瓦器皿 (5・78・101)は平底の底部から短い口縁部が外上方に伸びるもので全体的な器形が土師質皿に近似する。口縁を一単位でヨコナデし、他は粗くナデを施すなど調整も似ている。口径は土師質皿よりやや大きい。瓦器塚の系譜を引かない皿であると考えられる。

瓦質皿 (15)は瓦器塚が矮小化した形のものである。この皿が瓦器塚の系譜を引く小皿状の瓦質皿である可能性はあるものの一点のみの出土であることと、内面調整が不明瞭であることから明確に確認し得ない。

瓦質土釜(86) やや小型の土釜である。体部外面は横方向のヘラケズリ、内面は横方向のハケメが施される。罎から内湾する口縁部は段を持つが明瞭ではない。被熱したような痕跡はないが、内面は体部中ほどから底部にかけてやや磨耗している。

瓦質甕(80) 丸底でやや体部上半に最大径を持つ器形である。口縁部は大きく外反する。体部外面は平行叩き、内面にはハケ目が残る。口縁部はやや肥厚しかけている。14～15世紀頃のものと考えられる。

須恵質練鉢(24・50・76・77) やや小型で、口縁部が「く」の字状に肥厚する。14世紀代のものと考えられる。(76)などは口縁部の肥厚が明瞭でないため、14世紀後半頃の年代を考えることができるかもしれない。

漆器椀(49) 下半部のみ残存。内外面とも黒漆を塗布しており、見込みには桐の意匠が非常に細かく丁寧に朱描きされている。外面にも同様のもものが描かれていたが、実測時には漆が剝離しており図化できなかった。意匠は円形を意識した図法になっており、家紋として使用された可能性を考えることもできるが、花の数がまちまちであり、意匠化されず写実的であることなどから、家紋ではなく装飾として描かれたものであると考えられる。

第3節 まとめ

本次調査では多くの成果が得られた。遺構においては集石遺構SU1に連結する溝SD1や、土釜埋納遺構SO1など興味深い遺構が検出された。遺物においては遺構内から比較的多くの出土を見ることができた。日常雑器ばかりであるものの一通りの器種が出土していることから、器種間の共存関係の一端を知ることができる。包含層からは弥生土器の他に石鏝も出土している。これについては今後の調査成果が待たれる。

以下にいくつかの遺構について詳述する。

建物群 4棟の掘立柱建物が検出されたことは大きな意味を持つ。本次調査地の西側では数次にわたる調査が行われているが、土器片は出土するものの明確な遺構が検出されず、過去においての当該地の土地利用の形態を明確にし得なかった。しかしながら本次調査によって建物が検出されたことにより、14世紀後半頃において当該地の開発が行われていたことが明らかになった。

それではこれらの建物はどのような性格を持つのだろうか。まず考えられるのは段丘開墾者の住居である。周辺から日常雑器である皿や碗、鉢が多く出土していることからみても、倉庫や作業場のようなものではなく、住居であった可能性が高い。

もう一つの可能性としては、石川の西岸を走る高野街道を見下ろせる立地にあるため、南北朝の動乱期に戦略的意図をもって造営された仮屋ということも考えられる。しかしながら検出された建物が4棟と多いこと、鉄鏝などの武具が出土していないこと、烽火台など火をたいた形跡がないことと、積極的な根拠がないため、この可能性は低いものと考えられる。

次に建物相互の時期的関係について考えてみる。SB1及びSB2は主軸、規模ともに近似し、隣接していることから同時期に存在していたことはほぼ確実視される。主軸の点で言えばSD1やSB4もこれと同じくする。しかしSB3のみ主軸、規模ともに他のものと異なる。SB3の柱穴からは凶化できるような遺物が出土しなかったため、その時期を推測することは難しいが、SB3に伴う可能性の高いSE1からは他の遺構から出土しているものと同じ14世紀後半頃の瓦器塚が出土している。また、SB3周辺から出土した遺物にも、他の出土遺物との時期差を認められるようなものはなかった。

これらのことから推測すると、これら4棟の建物は同時期に並立していなかったとしても、その時期差は大きなものではなく、建て替えなど継続的な土地利用の範囲で捉えることができると考えられる。

瓦質楽(SL1)の設置は掘立柱建物の柱穴に重なる。SL1がSB1廃絶後に設置されたものと考えれば、SB1廃絶後も何らかの形で土地利用が続いていたものと考えられ、

S B 3はこの段階に存在したものである可能性もある。

建物S B 4 掘り込み土坑と周囲の柱穴で構成される建物である。この建物がどういった性格を持つものかは不明である。その特異な形態から住居というより、覆屋のような建物が想起される。家畜小屋などの可能性も考えられるが、掘り込み土坑内部の状況から見てそれは考えにくい。土坑内部には川原石が多く入っている。付近にこれらの大きさの川原石が存在しないため、埋め戻しをする際に偶然入ったものとするには無理があり、土坑の用途に関連するものである可能性が高い。南東隅に取り付く溝と併せて考えれば、何らかの作業小屋のような性格を考えることができるのではなかろうか。

土釜埋納遺構S O 1 先に述べたように土釜と皿・壺を組み合わせる埋納する遺構は当市域で多く検出されている。代表的な例としては、当市の天野山金剛寺遺跡の出土例があげられる。天野山金剛寺遺跡では火災後の焼土層を切り込んで埋納されており、災害復旧に伴う地鎮行為と考えられている。これらの例は、土釜の中に瓦質皿と土師質皿を入れて埋納するもので、本次調査のS O 1とは二つの相違点が認められる。一つはS O 1では瓦質皿ではなく、瓦器壺が使用されていること、もう一つは壺は土釜の外に配されており、土釜内に他の器物は存在しないことである。

天野山金剛寺遺跡の1992年度調査(KGT92-3)のS X 1でも土釜の外に土師質皿を配していたが、土釜内には瓦質皿が納められていた(註2)。瓦質皿については、瓦器壺の様式変遷に連続するものと考えられており、同時期に存在することもあるものの、瓦器壺に比べると若干時期が下がると考えられる。しかし、当該資料では瓦器壺の最も新しい段階のものが使用されているため、同時期に瓦質皿が存在した可能性もある。そのため、時期差については確実に言えないが、S O 1で瓦質皿が使用されなかったことは、瓦質皿出現以前と以後の時期差を示唆するものである可能性がある。

以上のように多くの成果が得られた調査であったが、問題点は残している。検出された建物は4棟であったが、周囲にまだ建物が存在する可能性がある。一単位の建物群の棟数がいくつであるかは、その性格を考える上でも重要な要素である。建物群すべてが検出されれば、生活空間内においてS O 1のような祭祀行為がどのような位置において行われるのかを知ることでもできよう。いずれにしても今後の調査成果の蓄積が待たれる。

(中尾)

(註1) 尾上実・森島康雄・近江俊秀 1995「瓦器壺」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会

(註2) 河内長野市遺跡調査会 1994『河内長野市遺跡調査会報Ⅳ 天野山金剛寺遺跡』



第27図 I CW96-3 遺構配置図 (1/120)

第3章 岩瀬北遺跡 I Z N97-1

第1節 調査に至る経過

本次調査の対象となった国道371号は、平安時代の空海による高野山金剛峯寺創建に伴い整備された高野街道と平行、あるいは重複する道路である。この道路は大阪府と和歌山県北部、あるいは奈良県南部を結ぶ主要交通路となっており、その交通量は年々増加の一途をたどっている。このため、バイパス道路が計画され一部供用されている。

今回のバイパス道路延伸工事に先立ち、平成9年12月25日に周知の遺跡、高野街道に対する文化財保護法57条の3に基づく発掘通知が大阪府富田林土木事務所長から本市教育委員会を経由して文化庁に提出された。それに伴い、大阪府富田林土木事務所と本市教育委員会は遺跡の取り扱いについての協議を持ち、その結果、仮設進入路工事完了後に範囲確認調査を実施することとなった。

範囲確認調査の結果、道路予定地の一部である河内長野市岩瀬75番地付近から遺構造物が確認された。遺構造物はその出土状況から集落跡の可能性が高く、道路遺構である高野街道とは性格を異にすると考えられた。このため、確認された遺構造物を高野街道と分離し、岩瀬北遺跡として文化庁に57条の6に基づく遺跡の新規発見の通知を行った。

本調査範囲は、大阪府富田林土木事務所との協議の結果、道路本体及び一部周囲の工事影響範囲を含むもので、調査面積は約350㎡である。調査は本市教育委員会の指導の下、河内長野市遺跡調査会が行い、平成10年2月24日から平成10年3月25日まで実施した。調査区は岩瀬79番地他に位置する。

第2節 位置と環境

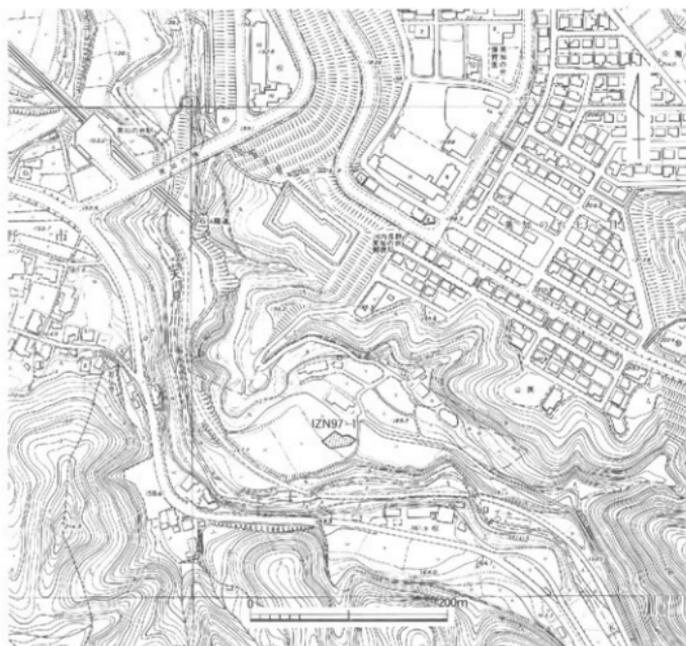
和歌山県との県境、紀見峠付近に源を発する石川の支流である天見川は、狭小な河谷を形成しながら北流し、本市石仏付近で河谷を広げる。遺跡は石仏の対岸、天見川右岸にあたる岩瀬86番地一帯の狭い谷に開かれた標高165mの段々の水田に広がる。

この天見川の河谷には、前記のとおり高野街道が通っている。このため河谷の少し開けた場所には中世の遺跡が分布している。上流に向かって約1.5kmには平安時代末から鎌倉時代の寺院跡である岩瀬薬師寺遺跡(第1図30番、以下同図)や集落跡の千早口駅南遺跡(29)、さらに約2km上流の天見には天見駅北方遺跡(28)や蟹井瀬北遺跡(27)、蟹井瀬神社遺跡(80)、蟹井瀬南遺跡(26)が位置している。遺跡は谷部だけでなく、尾根の上にも分布

している。天見川の左岸を見下ろす尾根上には、中世墳墓の地藏寺東方遺跡(134)が所在する。さらに天見駅北方遺跡を見下ろす東側の頂には旗尾城跡(71)、当遺跡を見下ろす南側尾根上には石仏城跡(69)などの中世城郭が位置している。

また、当遺跡より下流域では左右の河岸段丘に縄文時代から近世までの遺跡が分布している。特に約1.5km下流の右岸上には旧石器時代から近世の大規模な複合遺跡である三江市遺跡(56)や前期古墳の大師山古墳(4)が位置している。

天見川流域の遺跡の特徴は、やはり高野街道に沿って分布する中世の遺跡群であり、三江市遺跡を除けば、小規模な集落跡と思われる遺跡群が分布している。さらには、高野街道を見下ろす尾根上には、中世城郭だけでなく中世墳墓が築かれていることも注目される。



第28図 調査区位置図 (1/5000)

第3節 調査の結果

1 概略

調査は二段になった水田を調査したもので、上段水田を調査区上段(以下「上段」という)、下段水田を調査区下段(以下「下段」という)とした。上段・下段とも遺構面は、上下2層確認できたが下段は層の堆積状況から上層遺構面での遺構検出は困難であり、一部を除いて地山面で検出した。

2 層序

地山面は、調査区の南西側から南側を流れる天見川に向かって斜面を下げている。また、東側には天見川から小谷が切り込んでいるため、この方向にも傾斜している。このため、上段は東側及び南西側、下段は南西側の堆積が厚く山側は薄い。

層序は調査区北西壁では上段が上層から①耕土、②床土、③褐灰色細礫混じり粘土、あるいはその下層の④黒色粘土が基本層序となる。約1mの比高差をもっており、埋没深度が深い。南西端では②床土と③褐灰色細礫混じり粘土の間に3層の間層が見られる。しかし、この3層は層差が明確でなく、短期間に堆積した可能性がある。下段も同じように南西端では層厚が厚いが、上段ほどではなく比高差は0.3mで、①耕土、⑨褐灰色細礫混じり粘土、⑩褐灰色細礫混じり粘土(地山ブロックを含む)、そして⑬褐灰色細礫混じり粘土の層順で堆積していた。

北東壁では①耕土、②床土で、標高の高い北側で④褐灰色細礫混じりシルトの3層であるが、南側は東側の谷地形に連続するため②床土の下層に7層の堆積層が見られる。また、南東端では暗渠があるため上層から2m以上の切り込みが認められた。特に①層からは焼土と炭化物が確認された。(第46図)

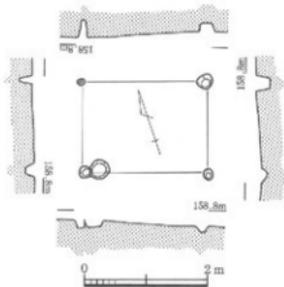
3 遺構と遺物

(1) 掘立柱建物

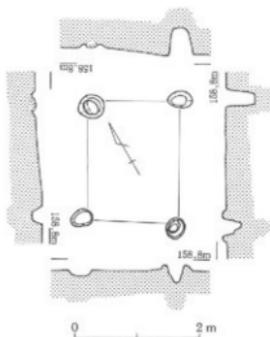
[SB1] (第29図)

上段の東南側に位置する。桁行1間(2.04m)×梁行1間(1.56m)、主軸方向N-71°-Wを示す。柱穴の最大径0.32m、深さ0.24mを測る。

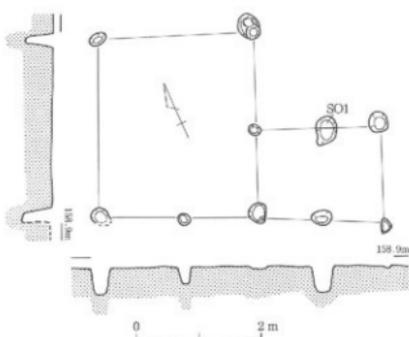
実測可能な遺物は出土しなかった。



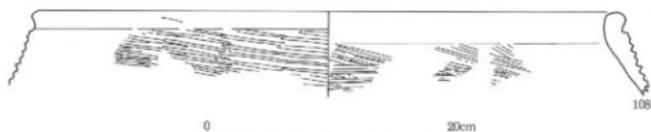
第29図 SB1 遺構実測図 (1/80)



第30図 SB 2 遺構実測図 (1/80)



第31図 SB 3 遺構実測図 (1/80)



第32図 SB 3 出土遺物実測図

[SB 2] (第30図)

SB 1の西側に近接して位置する。桁行1間(1.94m)×梁行1間(1.5m)、主軸方向N-30°-Eを示す。柱穴の最大径0.4m、深さ0.4mを測る。

実測可能な遺物は出土しなかった。

[SB 3] (第31・32図、図版9・22)

上段中央部に位置する。建物は北側をSD 2、西側をSD 3、東側をSD 5によって画される。桁行2間(2.8m)×梁行2間(2.5m)の主屋の東南側に、2間(2.1m)の張り出しをもつ。主軸方向N-25°-Eを示す。柱間は桁行1.4m、梁行1.1m、柱穴の最大径0.3m、深さ0.4mを測る。

遺物は柱穴から土師質の甕(108)が出土している。

(2) 溝

[SD 1] (第33図、図版10・20)

SD 1は上段の東側をN-14.5°-Eに偏しながら南北に走る溝である。南北両側は調査区外に伸び、北端から約3.6mのところまでSD 2と切り合う。SD 2より南側は検出長約



第33図 SD 1 出土遺物実測図

6m、最大幅1m、深さ0.2mを測るが、北側は溝の形状を崩し、最大幅1.2m、深さ0.1mとなっていた。遺構の埋土は上層が褐灰色細礫混じり粘土、下層が灰黄褐色細礫混じり

粘土(地山ブロックを含む)であった。

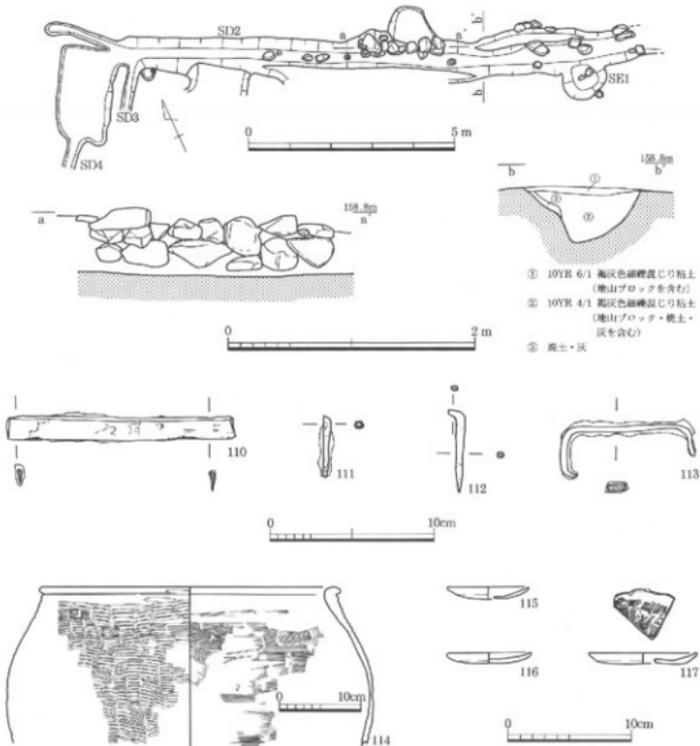
遺物は土師質皿(109)が実測できたが、その他は細片のため図化できなかった。

[SD2] (第34図、図版10・11・20)

SD2は上段の北側をN-65°-Wに偏しながら東西に走る溝である。東側は調査区外に伸び、東端は後世の暗渠で攪乱されている。西端はSD4と重複するが幅を広げながら直角に南側へ約2m余り屈曲するようである。遺構の規模は検出長約14.5m、最大幅0.95m(西側屈曲部は幅1.2m)、深さ0.41mを測る。埋土は上層が褐灰色細礫混じり粘土(地山ブロックを含む)、下層は褐灰色細礫混じり粘土に地山ブロック・焼土・灰が混じていた。また、下層の南側壁面には焼土層が流れ込んでいた。

当該遺構の東端から西へ約5.6mから7.6mの位置には、長さ2m、高さ0.5mの3段積み
の石垣が積まれている。

遺物は刀子(110)、鉄釘(111・112)、鏝(113)などの鉄製品、土師質皿(115~117)・甕



第34図 SD2遺構実測図(1/120・1/40)及び出土遺物実測図

(114)などの土器類が実測できた。その他、埋土中には焼土塊が多量に混入していた。

[SD3]

SD3はSD2から分岐するように、SD2の西端から直角に折れて南に伸びる溝である。遺構の規模は長さ5m、最大幅0.3m、深さ0.1mを測る。遺構の埋土は褐灰色細礫混じり粘土(地山ブロックを含む)であった。

実測可能な遺物は出土しなかった。

[SD4]

SD4はSD2の西端から南に向かってN-40°-Eに偏しながら伸びる溝である。遺構の規模は長さ5.6m、最大幅0.2m、深さ0.1mを測る。北端はSD2の屈曲部と重複する。

実測可能な遺物は出土しなかった。

[SD5]

SD5はSD2の東端から約6.5mの位置から南側へN-25°-Eに偏しながら伸びる溝である。遺構は検出長5.5m、最大幅0.7m、深さ0.04mを測る浅い溝である。

実測可能な遺物は出土しなかった。

[SD6]

SD6はSD5の北端から0.8m南の位置から分岐して、北西へN-60°-Wに偏しながら伸びる溝である。遺構の規模は長さ2.8m、最大幅0.3m、深さ0.1mを測る。

実測可能な遺物は出土しなかった。

[SD7] (図版9)

SD7は上段中央をSD8と平行しながら東西にN-50°-Wに偏して走る溝である。西側は調査区外に伸びる。遺構の規模は検出長18m、最大幅0.4m、深さ0.1mを測る。埋土は褐灰色細礫混じり粘土に地山ブロック・焼土・灰が混じていた。

実測可能な遺物は出土しなかった。

[SD8] (図版9)

SD8は上段中央を約0.3mの間隔でSD7と平行しながら東西にN-50°-Wに偏して走る溝である。西側は調査区外に伸びる。遺構の規模は検出長18m、最大幅0.4m、深さ0.1mを測る。埋土は褐灰色細礫混じり粘土に地山ブロック・焼土・灰が混じていた。

実測可能な遺物は出土しなかった。

[SD9]

SD9はSD4の下層に位置し、SD4と同様に南北にN-40°-Eに偏して走る。遺構の規模は検出長3.9m、最大幅0.25m、深さ0.1mを測る。埋土は黒色粘土であった。

実測可能な遺物は出土しなかった。

[SD10] (図版11)

SD10は下段の北側をN-50°-Wに偏しながら東西に走り、両端は調査区外に伸びる。遺構の規模は検出長14.3m、最大幅0.65m、深さ0.06mを測る。埋土は褐灰色細礫混じり

粘土(地山ブロックを含む)であった。

実測可能な遺物は出土しなかった。

(3) 井戸

[SE1] (図版10)

SE1は上段の東側端に位置する。平面形が楕円形を呈する素堀りの井戸である。北側一部がSD2と重複する。遺構の規模は長径1.06m、短径0.98m、深さ0.31mを測る。

遺物は出土しなかった。

(4) 土坑

[SK1] (第35図、図版21)

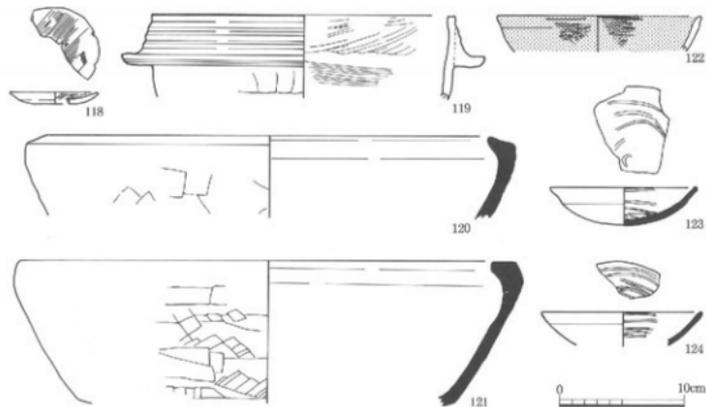
SK1はSD3の東側約1.2mに位置する。遺構の平面形は不整な長方形を呈し、北側はSD2によって切られている。主軸方向N-30°-Eを示す。遺構の規模は検出長軸2.68m、短軸1.46m、深さ0.2mを測る。埋土は上層が褐灰色細礫混じり粘土に地山ブロック・焼土・灰が混じる。下層は褐灰色細礫混じり粘土であった。

遺物は土師質皿(118)・土釜(119)、瓦質火鉢(120・121)が実測できた。

[SK2] (第35図、図版21)

SK2はSK1の南側約1.2mに位置する。遺構の平面形は不整な長方形を呈し、西端はSD3によって切られている。主軸方向N-73°-Wを示す。遺構の規模は検出長軸2.7m、短軸0.8m、深さ0.1mを測る。埋土は上層が褐灰色細礫混じり粘土(地山ブロックを含む)、下層は黒色粘土である。

遺物は黒色土器B類の埴(122)が実測できた。



第35図 SK1・2・4出土遺物実測図

[SK3] (図版9・12)

SK3はSK2の東側約1.7mに位置する。遺構の平面形は不整な隅丸方形である。主軸方向N-55°-Wを示す。遺構の規模は長軸1.9m、短軸1.26m、深さ0.1mを測る。埋土は上層が褐灰色細礫混じり粘土に地山ブロック・焼土・灰が混じる。下層は褐灰色細礫混じり粘土であった。

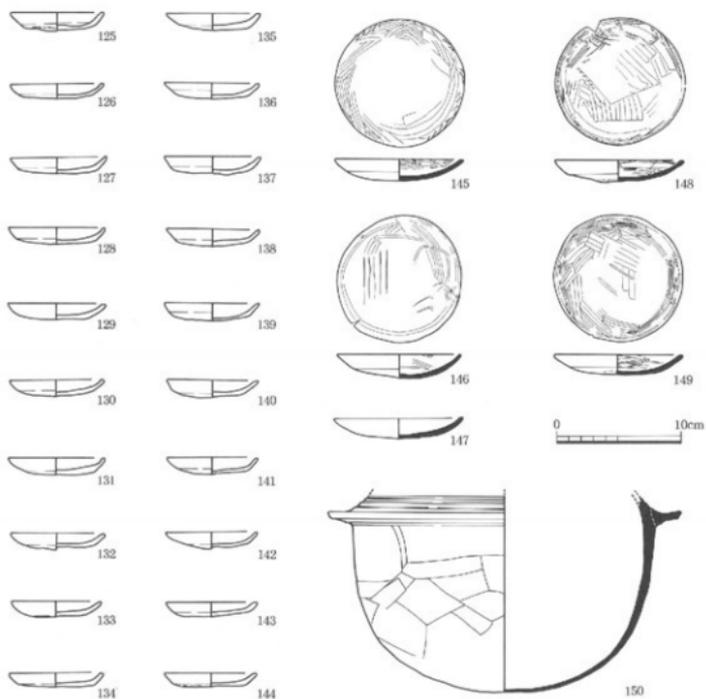
土器片、鉄釘が出土しているが、実測可能なものはなかった。

[SK4] (第35図、図版21)

SK4はSK2の南側1.5mに位置する。遺構の平面形は楕円形を呈し、主軸方向N-67°-Wを示す。遺構の規模は長径0.9m、短径0.48m、深さ0.15mを測る。埋土は黒色粘土であった。

遺物は瓦器塊(123・124)が実測できた。

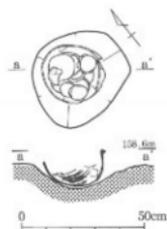
(5) 土釜埋納遺構



第36図 SO1出土遺物実測図

[SO1] (第36・37図、図版13・21・22)

SO1はSK3の北側約0.1mに位置する。長径0.4m、短径0.35mの堀形に瓦質土釜(150)とその内部に土師質皿20点(125～144)、瓦質皿5点(145～149)が埋納されていた。埋土は褐灰色細礫混じり粘土に地山ブロック・焼土が混んでいた。



第37図 SO1遺構実測図 (1/20)

(6) 遺物出土ピット

[SP1] (第38図、図版13・22)

SP1はSE1の南側約0.5mに位置し、平面形が楕円形を呈する。遺構の規模は長径0.4m、短径0.33m、深さ0.06mを測る。

遺物は瓦質土釜(152)が実測できた。

[SP2] (第38図、図版22)

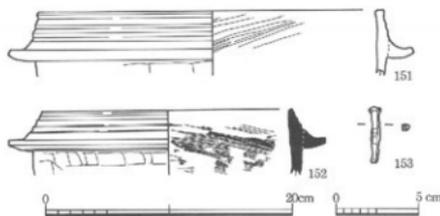
SP2はSO1に接して位置し、平面形は楕円形を呈する。遺構の規模は検出長径0.4m、短径0.26m、深さ0.2mを測る。

遺物は土師質土釜(151)が出土している。

[SP3] (第38図、図版22)

SK2の東端に位置し、平面形が円形を呈する。遺構の規模は径0.4m、深さ0.09mを測る。

遺物は鉄釘(153)が出土した。

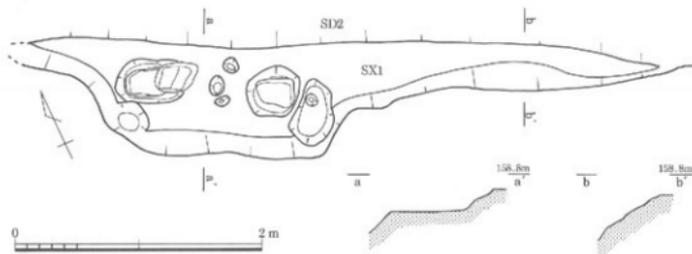


第38図 SP1～3出土遺物実測図

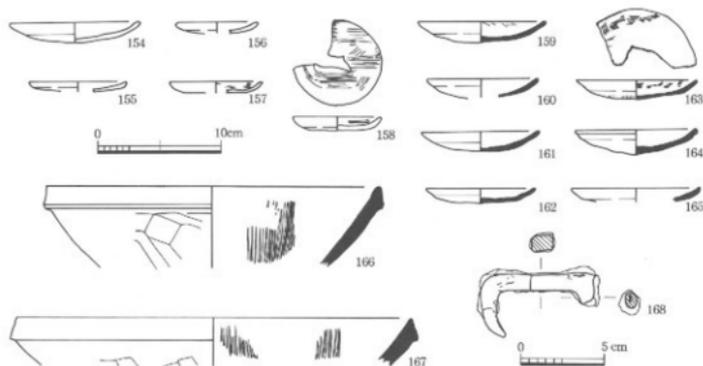
(7) その他

[SX1] (第39・40図、図版22・23)

SD2の東端より西約6mに位置するところで、溝の南側肩をテラス状に削平している遺構である。遺構の規模は長さ5.09m、幅0.92m、深さ0.15mを測る。内部からは礎石と



第39図 SX1遺構実測図 (1/40)



第40図 S X 1 出土遺物実測図

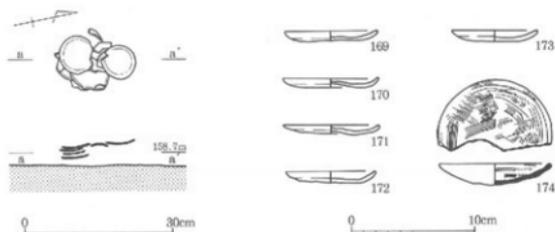
思われる川原石を伴うビットが2カ所検出されているが関係は不明である。

遺物は土師質皿(154~158)、瓦質皿(159~165)、瓦質插鉢(166・167)が実測できた。他に錠状の鉄製品(168)が出土している。

[S X 2] (第41図、図版14・23)

S X 1の南側肩部とS D 6の間に位置する。地山面より0.15m上位で検出されたもので、包含層中の遺構と思われるが、詳細は不明である。

土器の集中遺構で土師質皿(169~173)と瓦質皿(174)とが重なって出土した。



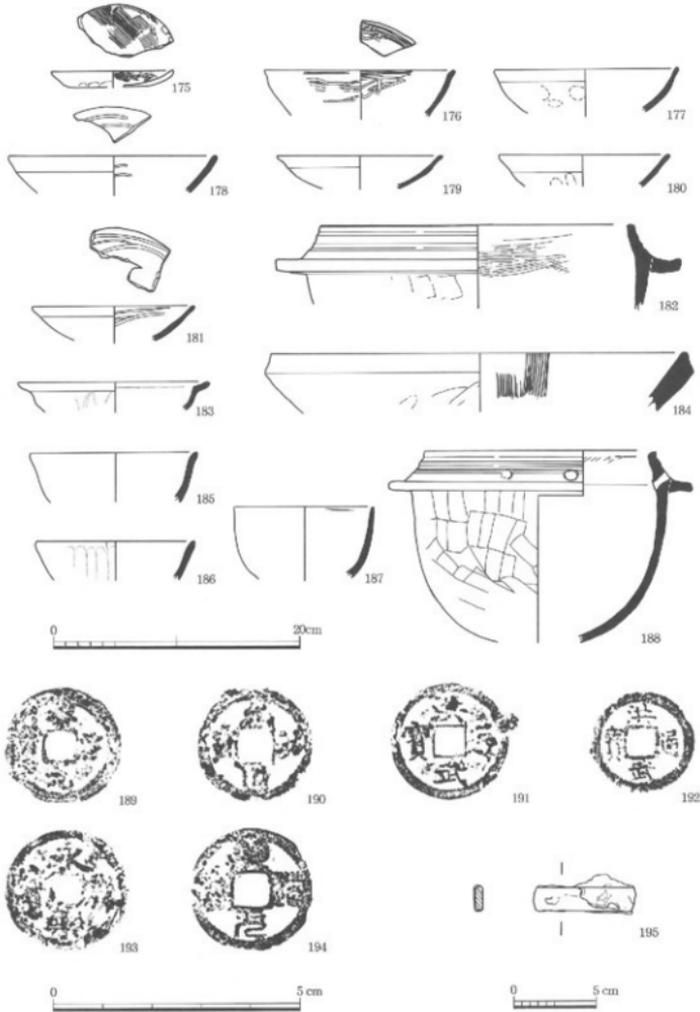
第41図 S X 2 出土状況図 (1/10) 及び出土遺物実測図

(8) 包含層(第42図、図版14・23)

包含層からの出土品で実測可能であったのは、土師質皿(175)、瓦器埴(176~181)、瓦質土釜(182・188)、瓦質插鉢(184)、磁器類(183・185~187)、渡来銭(189~194)、鉄製品(195)であった。

土師質皿(175)は内面にハケ目を施したものであった。瓦器埴は、(176)が尾上編年 I - 1の可能性がある。(177・178)は III - 1、(179・181)は IV - 2、(180)は IV - 1の時期に

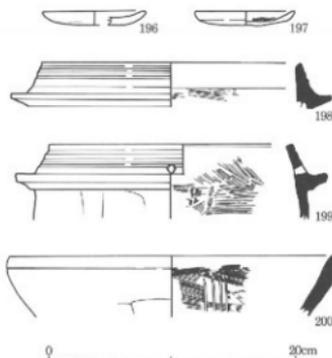
該当するようである。瓦質土釜は、(182)が口径25.5cm、(188)が口径18.5cmとやや小型で
 鈔近くには2孔1組がうがたれている。磁器(183)は龍泉窯の青磁坏で線描の連弁文が外
 面に施されている。森田編年のⅢ-4で14世紀代と考えられる。(185・186)は青磁碗、
 (187)は白磁碗である。渡米銭は6枚で北宋銭の祥符元宝(189、初铸1008年)・明道元宝



第42図 包含層出土遺物実測図

(194、初鑄1032年)・元祐通宝(190、初鑄1086年)、明銭の洪武通宝(191・192、初鑄1368年)・永楽通宝(193、初鑄1408年)である。鉄製品(195)は板状で片方の端部が鈍い刃状を呈している。

包含層のうち、上段の南側谷の堆積層から出土したもので実測可能な遺物は土師質皿(196・197)、瓦質土釜(198・199)、瓦質播鉢(200)であった。(196・197)は口径8cm、高さ1cmを測る。(199)は口径19cmのもので一孔がうがたれている。(200)は口径27cm、内面に1.7cm幅に4条の播り目を施す。

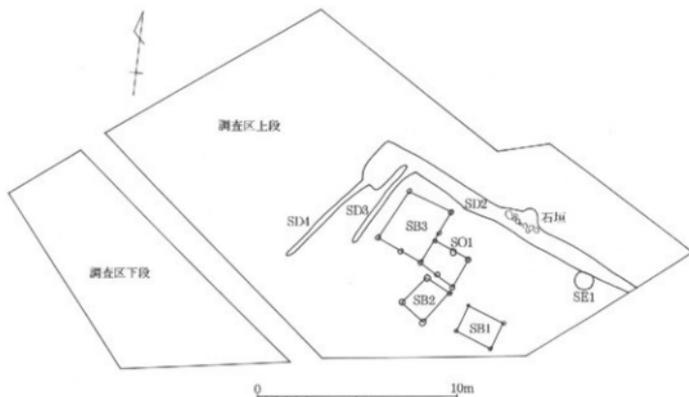


第43図 包含層(上段南側谷堆積層)出土遺物実測図

第4節 まとめ

1 調査の成果

調査の結果、主となる遺構は、検出された北東側をSD2、北西側をSD3あるいはSD4によって画された屋敷地の一部と思われる遺構である。南東、南西側は調査区外に広がると見られ、未検出である。屋敷内の建物は、復元したSB2とSB3を中心とする



第44図 主要遺構配置模式図(1/250)

考えられるが、現状の柱穴の検出状況では明確な建物は復元できなかった。また、建物以外には土坑・井戸が検出されている。

さらに、この建物は火災にあっており、柱穴の埋土やSD2の溝の埋土には南西側から流れ込んだように焼土と炭化物が多量に含まれていた。

この罹災した建物の建て替えの時に、地鎮祭祀としてSO1が埋められたようである。その時期は、土釜に埋納されていた瓦質皿が天野山金剛寺編年(註1)の4類に分類されることから15世紀初頭と考えられる。

また、検出されたSK2を除く各遺構から、尾上編年Ⅳ-3の瓦器坑から天野山金剛寺編年8類の瓦質皿が出土しており、包含層も同様で永楽通宝も出土している。このため遺構の下限は15世紀末頃と考えられる。尚、SK2からは黒色土器B類が出土していることから、この遺構面での時代の遡る遺構は、この土坑が上限であると考えられる。

この結果、当該遺跡の主な時期及び遺構は、14世紀から15世紀と考えられる屋敷を中心とするものである。

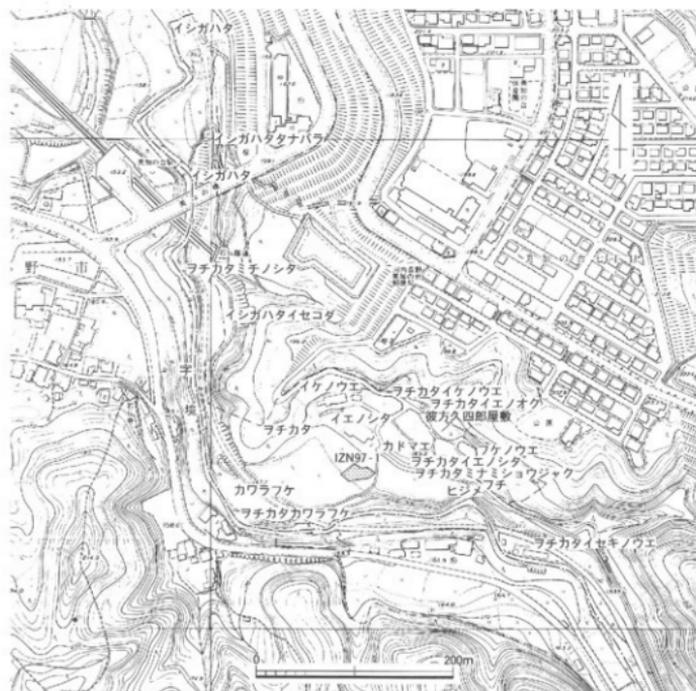
2 観心寺荘下岩瀬郷

遺跡の所在する岩瀬地区は、遺構の実年代である14世紀から15世紀前後の中世には、この地区から東側に位置する川上谷にある観心寺の荘園となっている。観心寺轄下の荘園観心寺荘は川上谷に分布する石見川・太井・鳩原・寺元・小西見と天見谷に分布する上岩瀬・下岩瀬の七郷から構成されている。この七郷は観心寺七郷とよばれ、鎌倉時代まで存続した。

調査地は、七郷内の下岩瀬に属する。下岩瀬に関する文献は、観心寺文書(註2)の中に見られるが、そのほとんどが売券・寄進状である。一番遡るものは正中2年(1325)の「乙次郎田地売券」で、これには下岩瀬という地名の記載はないが、「石畑」の字名がこの後に出てくる売券に記載されている下岩瀬の字名と合致する。元弘2年(1332)の「馬三郎田地売券」・北朝永和4年(1378)の「実秀田地売券」・応永11年(1404)の「僧覚尊田地売券」・宝徳3年(1451)の「千代女田地寄進状」・永正元年(1504)の「和泉修行興寺西坊海喜田地寄進状」に見られる下岩瀬の字名はすべて「石畑」である。

また、永正12年(1515)の「井堰人夫役日記」には「殿溝」の名がみえ、さらに同年の「下岩瀬河立算人用日記」には字名と作人の名が見られる。

これらの字名をすべて現地比定はできなかったが、「石畑」は調査地の北側約200mの天見川右岸に位置している。調査地との位置関係は山を挟んだ北側であるが、天見川沿いにつながる。この字石畑に相当する現在の耕地は約0.7町の広さを持っている。今回発掘された原敷地は、観心寺文書に見られる荘園の作人のものである可能性が高い。天見川沿いの狭小な谷にやや開けた場所を開墾し、あるいは購入することにより、寺家あるいは僧



第45図 調査地周辺の小字地名図 (1/5000)

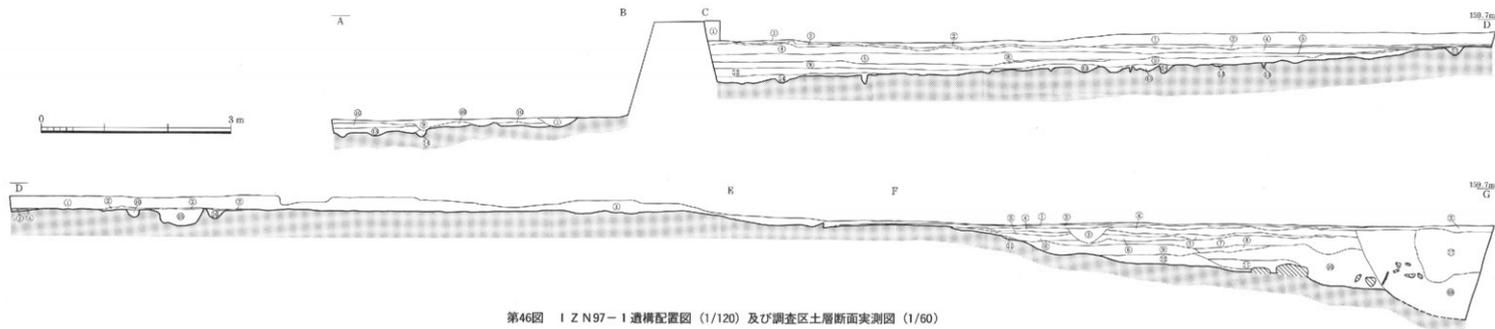
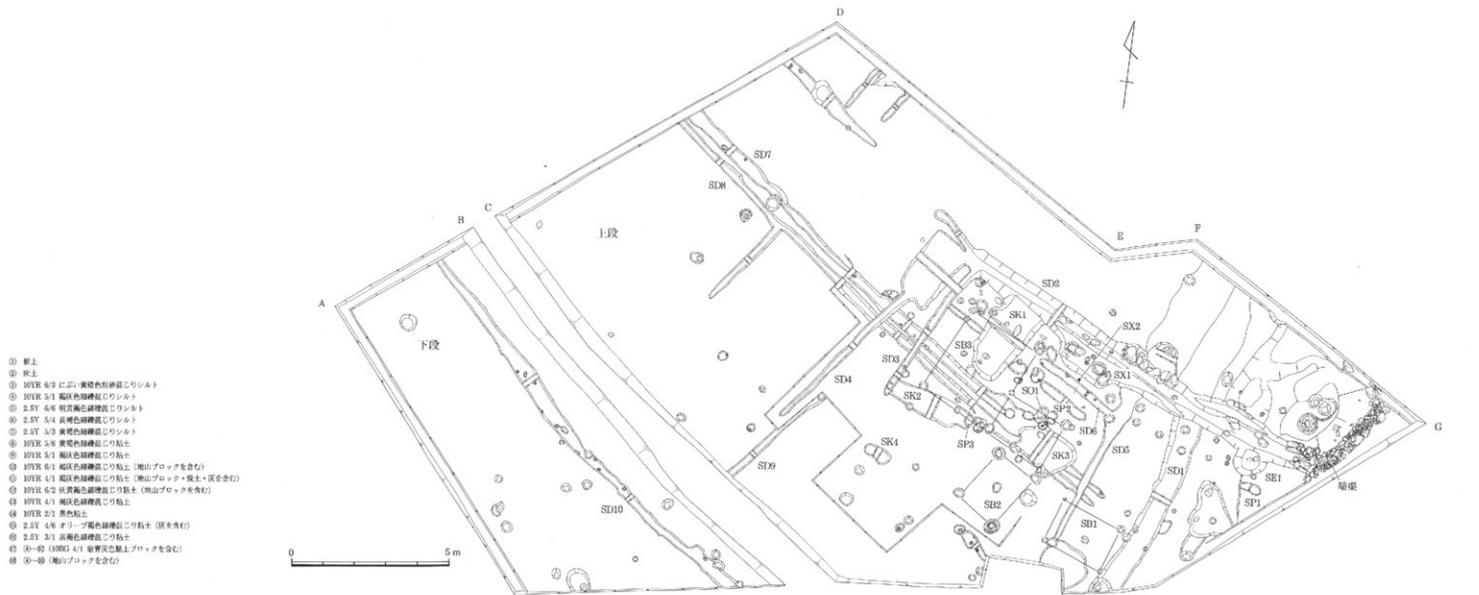
家に税を納めながら生活していたのではないかと推測される。また、土釜埋納の祭祀具の出土は、この形式の祭祀具の出土例のほとんどが市内では金剛寺や観心寺であることから、あるいは寺家に直接関係する人の屋敷である可能性も否定できない。さらに、近辺を通る高野街道の旅人相手に開口をしいていたのではないかと推測される。

また、当遺跡の立地する場所は、南側の蛇行する天見川に向かって開く谷間の緩斜面地で、現在は約1.5町の耕作地とため池1カ所、4軒の民家が分布して一つの谷間の小集落エリアを形成している。おそらく、検出された遺構の時代も、建物の棟数は今より少ないと思われるが現在とあまり変化のない風景が展開していたと思われる。

(尾谷)

(註1) 河内長野市遺跡調査会 1994『河内長野市遺跡調査会報Ⅷ 天野山金剛寺遺跡』

(註2) 河内長野市役所 1972『河内長野市史 第四巻 史料編一』



第46図 I Z N97-1 遺構配置図 (1/120) 及び調査区土層断面実測図 (1/60)

第4章 汐の宮町南遺跡 S I S 95-1

第1節 位置と環境

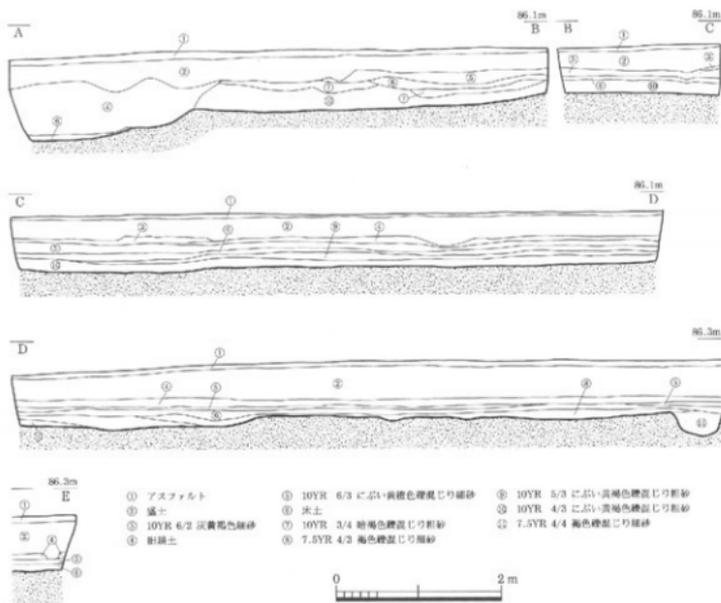
当該遺跡は汐の宮町90番地に所在する。岩湧山系を水源とする石川の西側の低位段丘上、標高約86mに位置する。

北側約0.2kmには同じ低位段丘上に中世の散布地である汐の宮町遺跡が位置する。

調査は共同住宅建設に伴う事前調査として実施した。



第47図 調査区位置図 (1/5000)



第48図 調査区土層断面実測図 (1/60)

第2節 調査の結果

1 遺構

調査区は1カ所設定し、調査面積は約115㎡である。基本層序は、②盛土、④旧耕土、⑥床土、⑨⑩にぶい黄褐色礫混じり粗砂であった。(第48図)

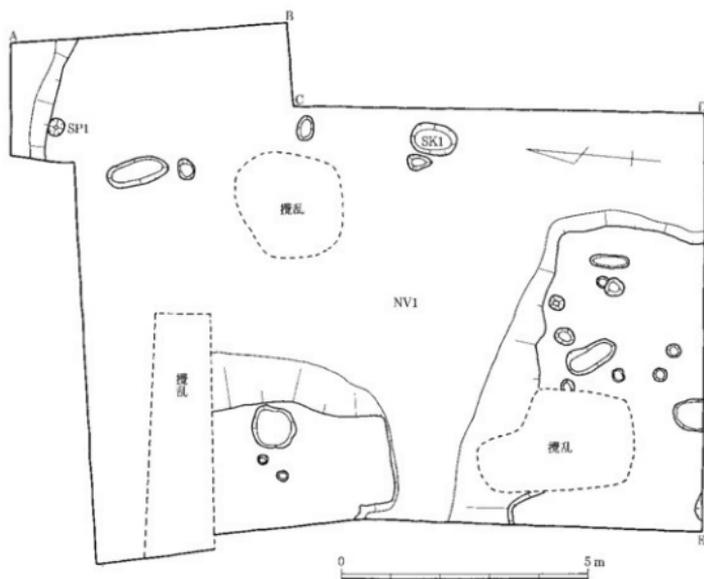
遺構は土坑、ピット、自然流路を検出した。遺物は弥生時代、奈良時代、中世のものが出土した。

(1) 土坑

[SK1]

SK1は調査区の東側に位置する。遺構の平面形はやや歪な楕円形である。規模は長径0.94m、短径0.62m、深さ0.14mを測る。

遺物は土師器の甕、器種不明の須恵器が出土したが、細片のため実測できなかった。



第49図 遺構配置図 (1/100)

(2) 遺物出土ピット

[SP1]

SP1は調査区の北側に位置する。遺構の平面形は楕円形である。規模は長径0.37m、短径0.3m、深さ0.06mを測る。

遺物は土師器の皿・甕が出土したが、細片のため実測できなかった。

(3) 自然流路

[NV1] (第50～53・55図、図版15・24～27)

NV1は南側を除く調査区のほとんどを占める。遺構は北側へとくだらかに下がっている。規模は、検出した深さ0.24mを測る。

遺物はサヌカイト製石鏝(201)、弥生土器の壺・高坏(203)・鉢(209)・甕、土師器の埴(210・211)・皿(212)・坏(213～216)・高坏(217・218)・鉢(219)・壺(220)・小型壺(221)・甕(222～241)・土釜(242～247)、須恵器の坏蓋(264～270)・坏身(272～288)・皿蓋(271)・壺(289～292)・鉢(293)、黒色土器A類埴、瓦器埴、須恵質練鉢が出土した。

(4) 包含層(第54・56図、図版24・25・27)

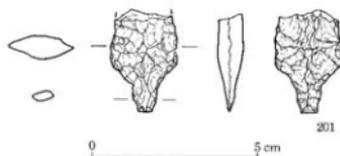
包含層からはサヌカイトの剥片、弥生土器の高坏(202)・壺・器台(204・205)・甕(206～208)、奈良時代の土師器の坏(248)・皿(249)・埴・鉢(250・251)・小型壺(252)・壺(263)・甕(253～261)・土釜(262)、須恵器の坏蓋・坏身(294～298)・壺(299)・鉢(300)、黒色土器A類埴、瓦器埴、陶器埴が出土した。

(鳥羽)

2 遺物

今回の調査では、NV1及び包含層から石鏝、弥生土器、土師器、須恵器、黒色土器、瓦器、須恵質土器が出土した。ここでは実測が可能であったもののみ記述を行う。

弥生土器に関しては『弥生土器集成』による器種名、編年を使用した。土師器・須恵器に関しては概ね『平城宮発掘調査報告』IIの用例にしたがい、河内地域に特徴的な土師器甕については『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』IVにしたがった。なお、須恵器の坏蓋については中村編年による型式名を併記した。



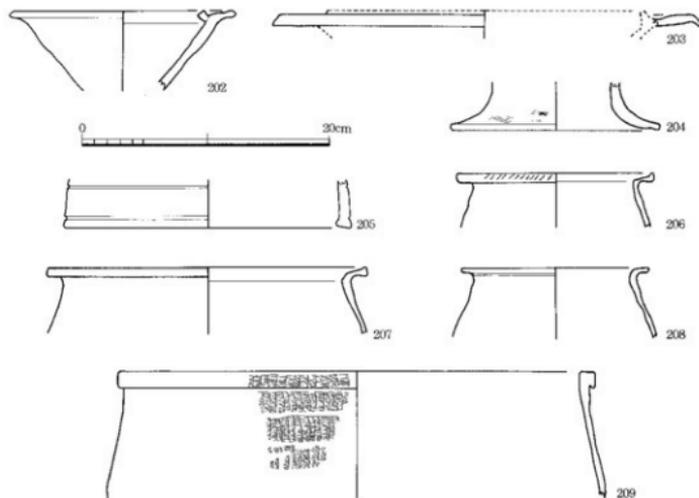
[石器] (第50図、図版24)

石鏝(201)はNV1より出土した。

サヌカイト製であり、茎部を有する。

残存長は3.1cmであった。

第50図 NV1出土石器実測図



第51図 N V 1・包含層出土弥生土器実測図

〔弥生土器〕(第51図、図版24)

N V 1及び包含層から高坏・壺・鉢・甕・器台等が出土した。その多くは保存状態が悪く、調整等の観察が困難なものも存在した。

高坏 (202)は包含層から、(203)はN V 1から出土した。(202)は口径18cm、水平口縁を有しており内側へ突出するかえり部を持つ。(203)は口径35cm、水平口縁の端部が下方に垂下しており、(202)と比較して坏部が浅い形態をしているものと考えられる。

鉢 (209)はN V 1から出土した。口径は38cmを測る。口縁端部外面及び体部外面には籐状文を施している。

甕 (206~208)は包含層から出土した。(206)は口径16cm、口縁端部が上方向につまみ上げられており、口縁端部外面には刻目を施している。(207)は口径25cm、口縁部が屈曲し口縁端部には面取が行われている。(208)は口径14cm、水平な口縁部を持つ。

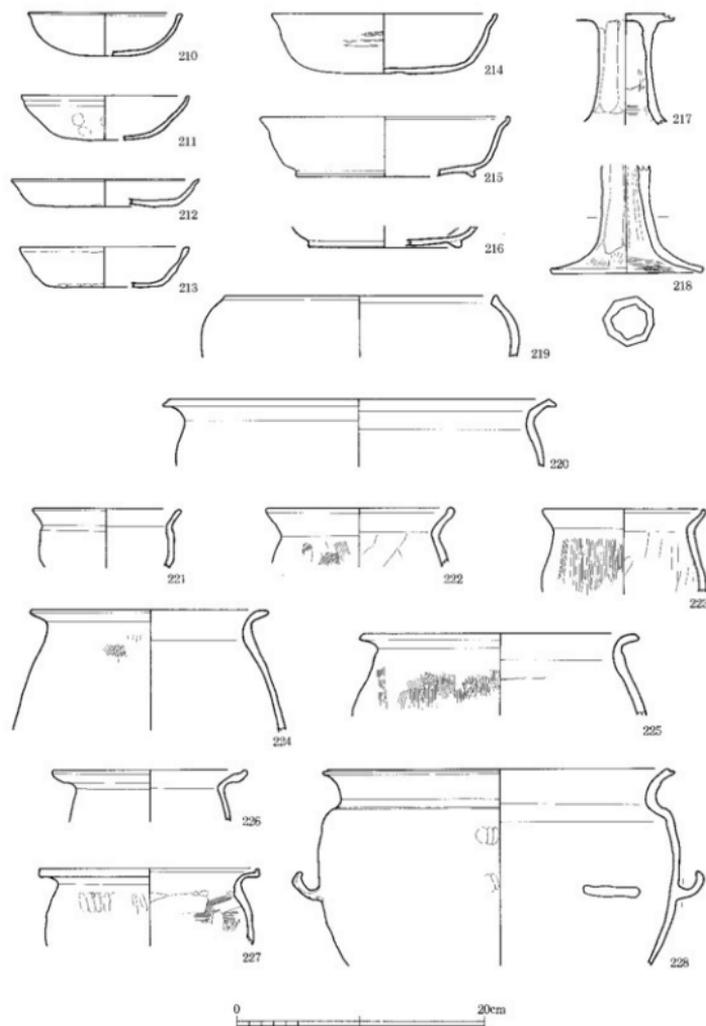
器台 (204・205)は包含層から出土した。(204)は小型の器台であり、脚端部には面取が行われている。(205)は大型品であり、2条の凹線が施されている。

〔土師器〕(第52~54図、図版24・25)

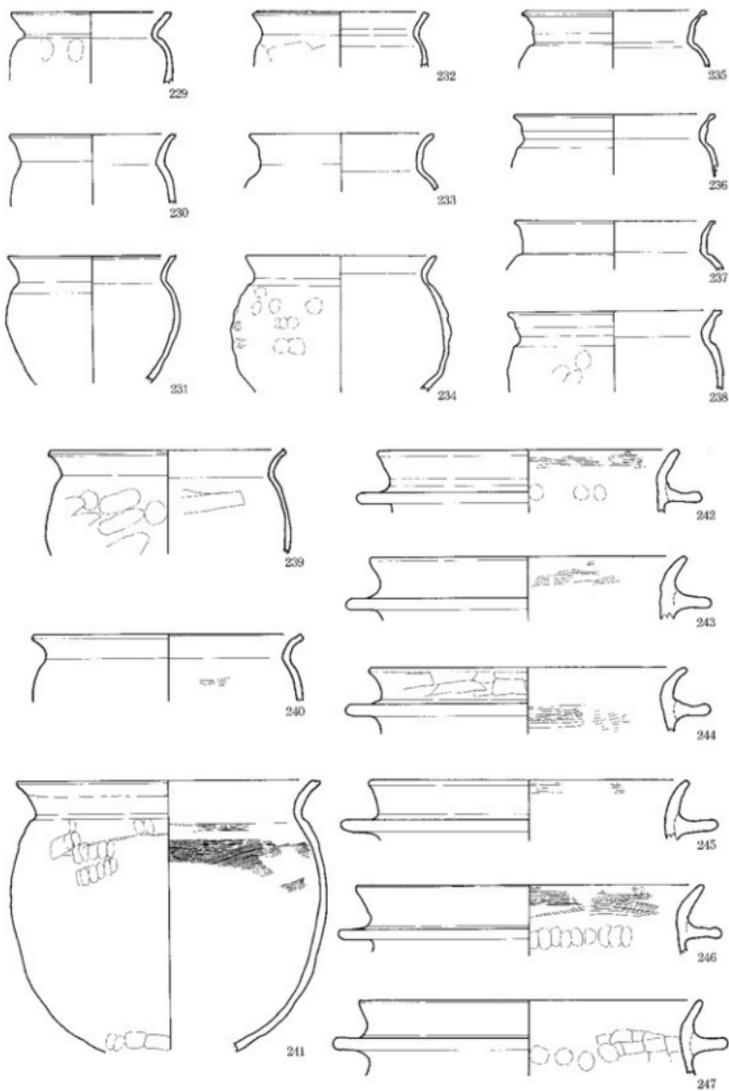
N V 1と包含層からまとまった量が出土した。器種は坏、埴、皿、高坏、壺、鉢、甕、土釜、製塩土器を認めることができた。保存状態は不良であり、器表面の風化によって調整が摩滅し、観察が困難なものも多く存在した。

坏A (213・214)はN V 1から出土した。(213)は口径13cm、器高3.3cmを測る。反外す

る口縁部を有し、口縁端部はわずかに肥厚する。底部外面にはコビオサエの跡が残る。
 (214)は口径18cm、器高5.0cmを測る。口縁部は下半が内弯し、上半がわずかに外反するA
 形態となっている。口縁端部は肥厚する。外面には粗い横方向のヘラミガキを加えている。



第52図 NV1出土土師器実測図(1)



第53図 NV1出土土師器実測図(2)

(213・214)ともに内面の暗文の有無については器表面の剝離のため、観察できなかった。

坏B (215・216)はN V 1から出土した。(215)は口径20cm、器高4.9cmを測り、高台を有している。口縁部は下半が内湾し、上半がわずかに外反するA形態である。内面は器壁が剝離しているため、暗文の有無は確認できなかった。口縁端部は肥厚する。(216)は底部の破片であるため口径、器高ともに不明であるが、内面に暗文が認められる。高台は断面三角形を呈する。

坏C (248)は包含層から出土した。口径13cm、器高2.9cmを測る。丸底を有し口縁端部は内傾する。

埴A (210・211)はN V 1から出土した。(210)は口径12cm、器高3.5cmを測る。半球状の器形を有し、口縁端部は内傾する。(211)は口径13cm、器高3.6cmを測る。外面にはユビオサエの跡が残っている。(210)と比較して口縁の外傾化が進んでいることから、時期的に新しいものといえる。

皿 (212)はN V 1から、(249)は包含層から出土した。(212)は口径15cm、器高2.3cmを測る。A形態の口縁部を有し、口縁端部は内傾する。底部には成形時のユビオサエの跡を残す。(249)は口径19cm、器高2.5cmを測る。B形態の口縁部を有し、底部から口縁部への移行は漸移的である。

高坏 (217・218)はN V 1から出土した。いずれも脚部を多角形に面取している。(218)は脚部径12cmを測り、内面では絞りが観察できた。

壺 (220)はN V 1から、(263)は包含層から出土した。いずれも大型品で口径約30cmを測る。広口の壺であり、ゆるく短く外反する口縁部を持つ。

小型壺 (221)はN V 1から、(252)は包含層から出土した。(221)は口径12cm、(252)は口径14cmの小型品である。

鉢 (219)はN V 1から、(250・251)は包含層から出土した。(219)は口径22cmを測る。口縁端部は肥厚し、内傾する面を持つ。(250)は口径18cmを測り、外面にはヘラケズリが認められる。(251)は口径19cmを測る。

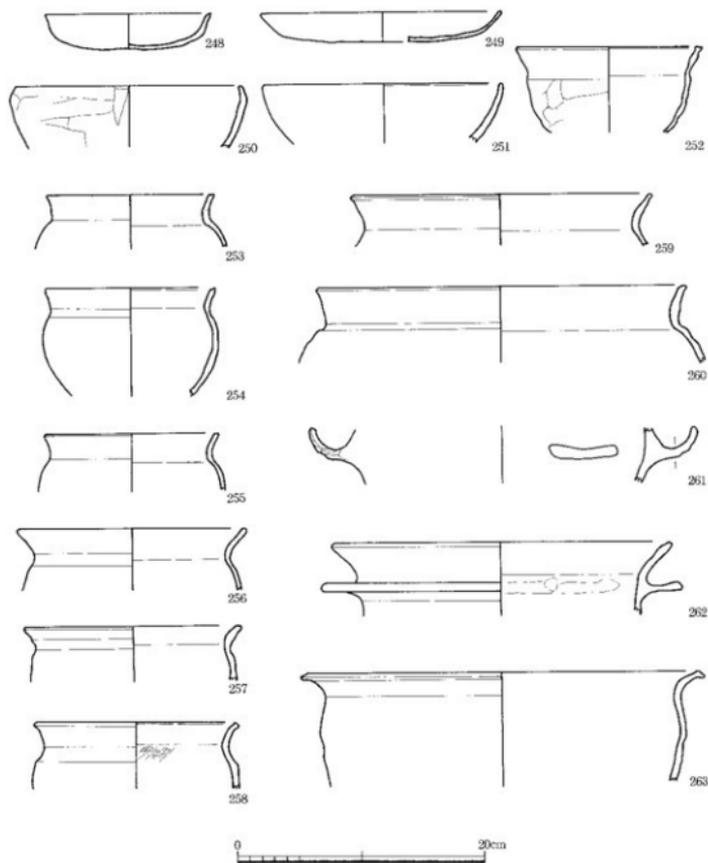
壺A (222～225)はN V 1から出土した。(222)は口径15cmを測り、(223)は口径13cmを測る。口縁は「く」の字に屈曲しており、(222・223)の口縁端部は上方向につまみ上げられている。体部外面には縦方向の刷毛目を施している。内面にはヘラケズリを行っている。(224・225)は口径が19cmを越える大型品であり、口縁端部は丸くおさめている。

壺B (229～241)はN V 1から、(253～260)は包含層から出土した。口径13～15cmのものと口径19～24cmのものとがある。外面に成形時のユビオサエの跡が認められるものがある。口縁端部の形態は、面を持つものと丸く収められているものとが存在する。南河内では最も多く見られる壺であり、在地産のものであると考えられる。

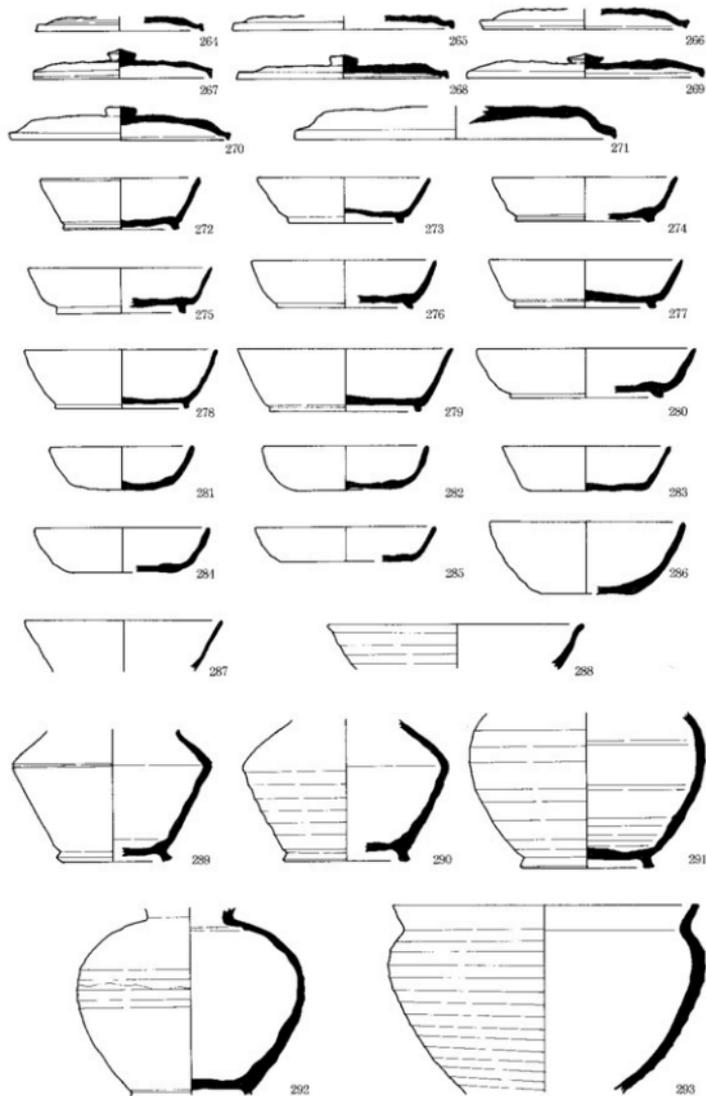
壺C (226)はN V 1から出土した。口径16cmを測り、口縁部は外方向へ強く屈曲している。

甕その他 (227)はNV 1から出土した。口径18cmを測る。口縁部は強く外反し、口縁端部は上方につまみ上げられている。体部内面には刷毛目を施しており、外面には縦方向のヘラケズリを行っている。なお、外面には煤の付着が認められる。人和からの搬入品であると考えられる。(228)はNV 1から、(261)は包含層から出土した。これらは甕の肩部に2つの把手をつけた形態のものである。

土釜 (242~247)はNV 1から、(262)は包含層から出土した。口径23~27cmにおさまるものである。いずれも口縁部以下は復元できなかったため、体部の形状は不明であるが、類例から判断して、通常の甕より縦長の体部を持っていたと考えられる。



第54図 包含層出土土器実測図



0 20cm

第55図 NV1 出土須恵器実測図

〔須恵器〕

(第55・56図、図版26・27)

NV 1及び包含層から坏身、坏蓋、皿蓋、埴、壺、鉢が出土している。

坏A (281~286)はNV 1から、(298)は包含層から出土した。法量は口径13~14cmを測る。口縁部は直線的に外反するもの(283・285)と、若干内弯しているもの(281・282・284・286・298)とがある。後者は底部がやや丸味を帯びている。

坏B蓋 (264~270)はNV 1から出土した。(267・270)は他のものより古い様相をしめしており、中村編年でのIV型式2段階に相当し、他のものはIV型式3段階に相当する。口径は13~

14cmのもの(264・267)と17~18cm(265・266・268~270)のものがある。

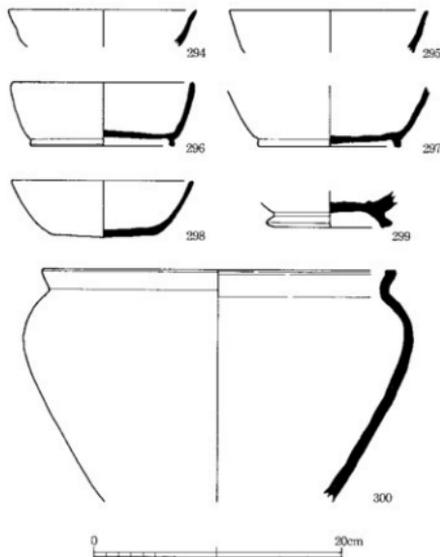
坏B (272~280)はNV 1から、(296・297)は包含層から出土した。法量は口径14~15cmのもの、口径17cmのものがある。坏Aに脚を付けた形状を呈しているが、坏Aより丁寧な作りとなっている。脚部が付けられている場所については、底部端に付けられているものと、やや中心部によった位置に付けられているものがある。

皿蓋 (271)はNV 1から出土した。口径は26cmになると判断できる大型品である。

壺K (289・290)はNV 1から出土した。体部断面が逆「く」の字形に屈曲しており、底部には脚を付けている。胴部最大径は16~17cmを測る。類例から、木米は細い頸部を付けていたものと推定できる。包含層から出土した(299)も脚部の形態から壺Kであると判断できる。

壺L (291・292)はNV 1から出土した。(292)は球形の体部に細長い頸部と底部には脚を付けている。(291)は(292)より若干縦長の胴部を持っている。

鉢 (293)はNV 1から、(300)は包含層から出土した。(293)は口径24cmを測る。体部に回転ヘラケズリを施している。(300)は口径28cmを測る。肩が張り、短く上方へのびる口縁部を持つ。



第56図 包含層出土須恵器実測図

(太田)

第3節 まとめ

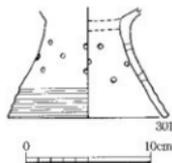
本遺跡が確認されるまで、市域北部における石川西岸の低位段丘上には、氾濫原のため遺跡が営まれていないであろうと推測されていた。しかし、調査の結果、多くの遺物が出土した。

今回の調査区から出土した遺物は、弥生土器と奈良時代のものが多くを占めていた。弥生土器は畿内第II様式末から第III様式前半にかけてのものである。奈良時代の遺物は、一括性に乏しく、比較的広い時期にわたっている。これらの遺物は遺存状況が悪く、特に土師器では暗文の有無、ヘラミガキの範囲等の観察が困難であったため、正確な年代を押さえるのは難しいが、概ね平城IIIから平城VIにかけての遺物であり、8世紀前半から後半にかけてのものである。

遺構の密度は希薄で、ほとんどがNV1から出土したことから、今後遺構が検出されるとすれば地形的に標高の高い調査区の南側、もしくは西側の中位段丘崖との間に存在する可能性がある。

また、包含層には弥生土器、NV1の底部の地山にはサヌカイトの剥片が含まれており、調査終了時に断ち割りを行ったが弥生時代に相当する遺構面は検出されなかった。

なお、(301)は平成10年9月に集合住宅の建設工事に伴う確認調査(SIS98-1)において、攪乱坑の中から出土した弥生土器である。畿内第IV様式の台付鉢の脚台部と考えられる。上半部には円形の透し孔を有し、下半部には3条の凹線文を有する。



第57図 SIS98-1出土弥生土器実測図

(鳥羽・太田)

圖 版



第1調査区全景 (北から)



第2調査区全景 (北から)



調査区全景 (西から)



SB1・2・3・4 (南西から)



SB1 (北から)



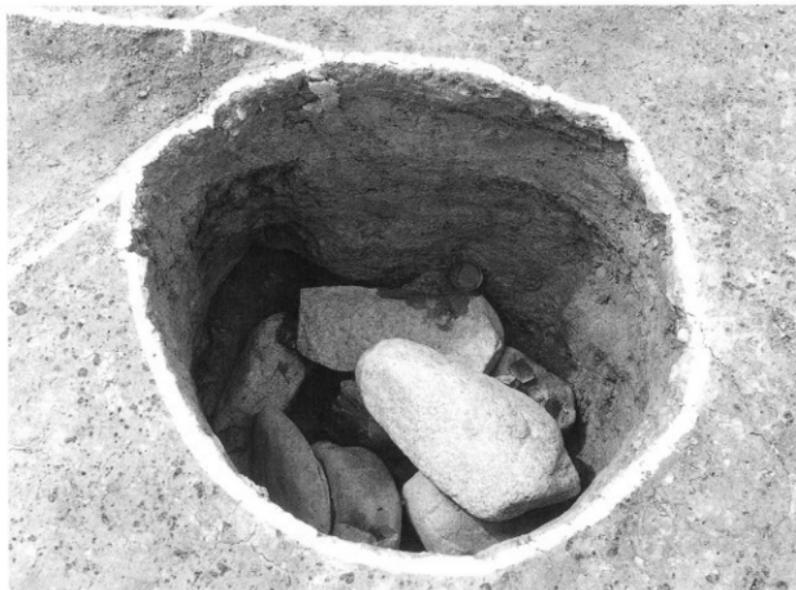
SB2 (東から)



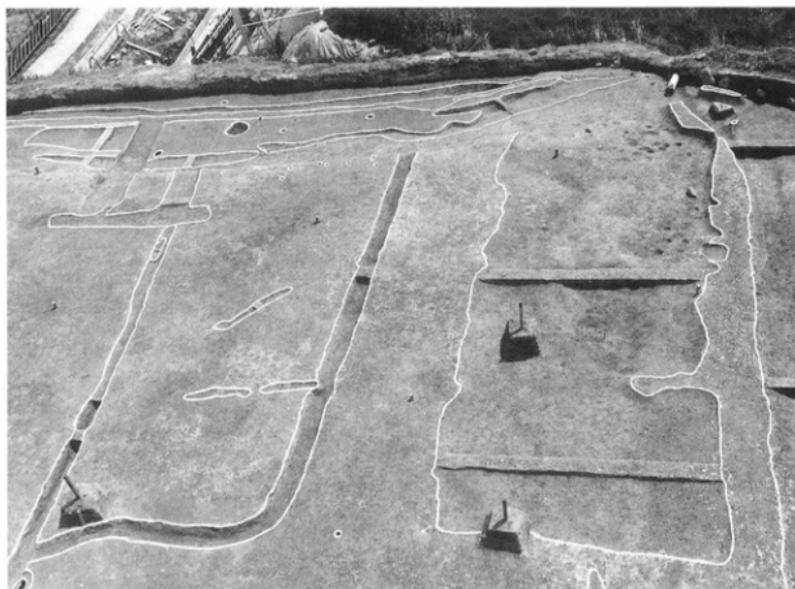
SB3 (西から)



SB4 (北から)



SE1 (南東から)



SK7 (北西から)



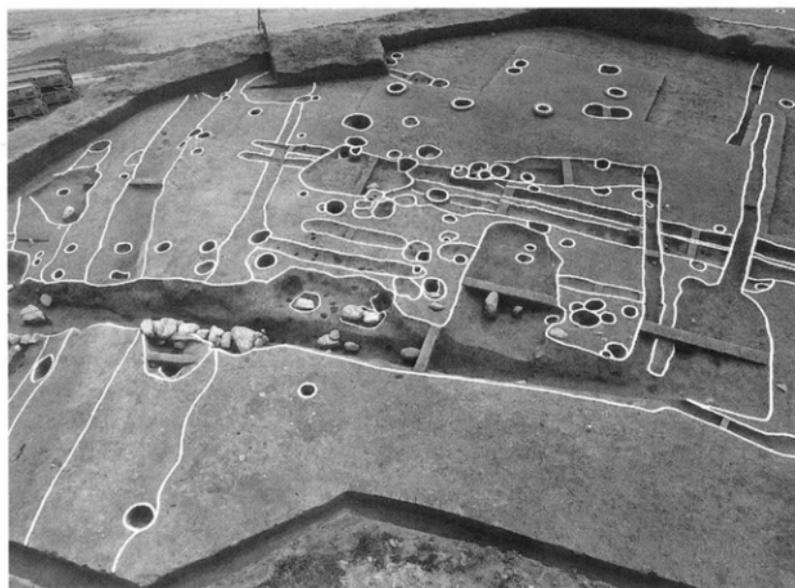
S01 (南西から)



SU1 (南西から)



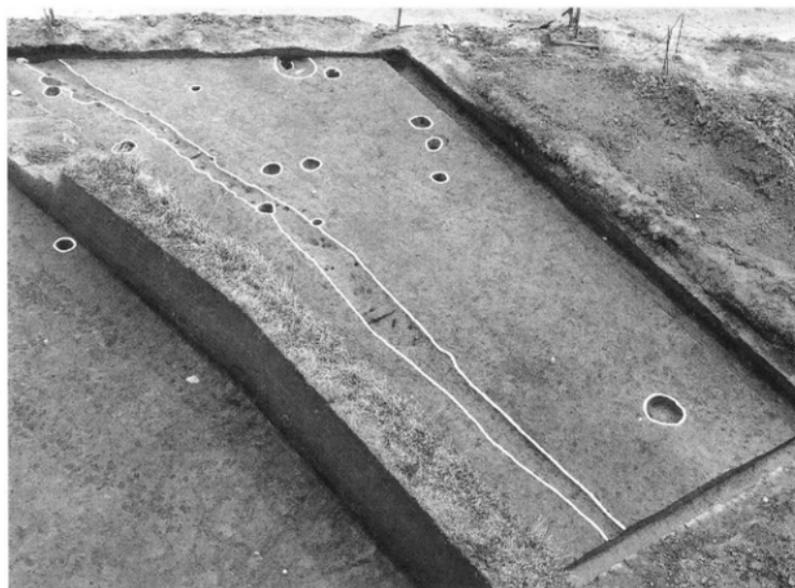
調査地前景 (北から)



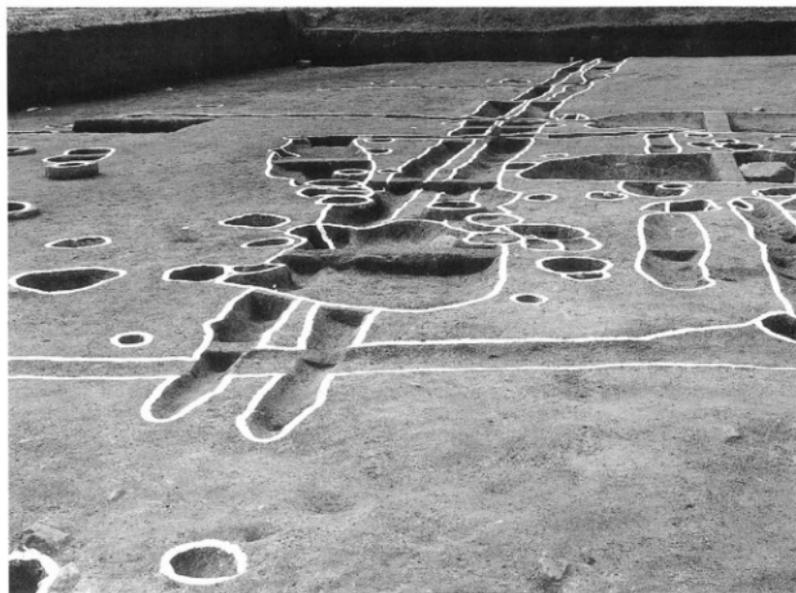
調査区上段全景 (北から)



調査区上段全景 (北西から)



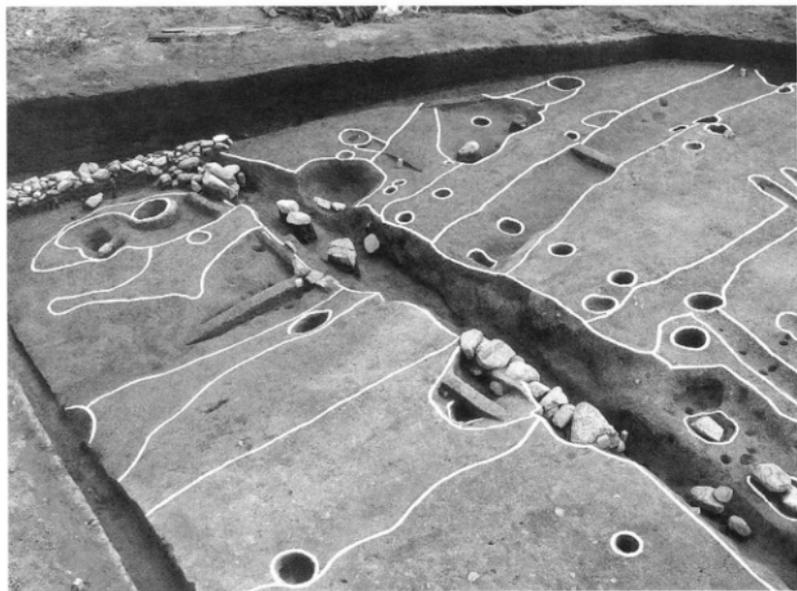
調査区下段全景 (北西から)



SB3・SD7・SD8・SK3 (東から)



SB3 柱穴検出状況



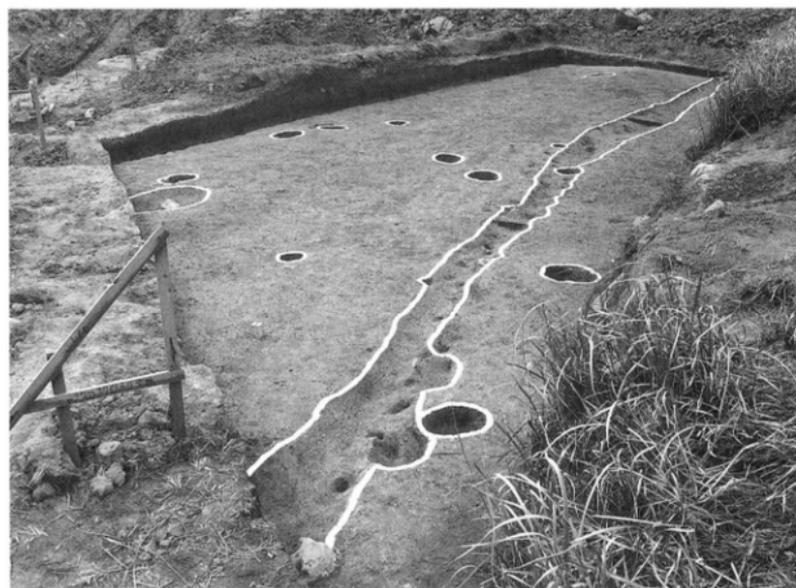
SD1・SE1 (北西から)



SD2・SE1 (北東から)



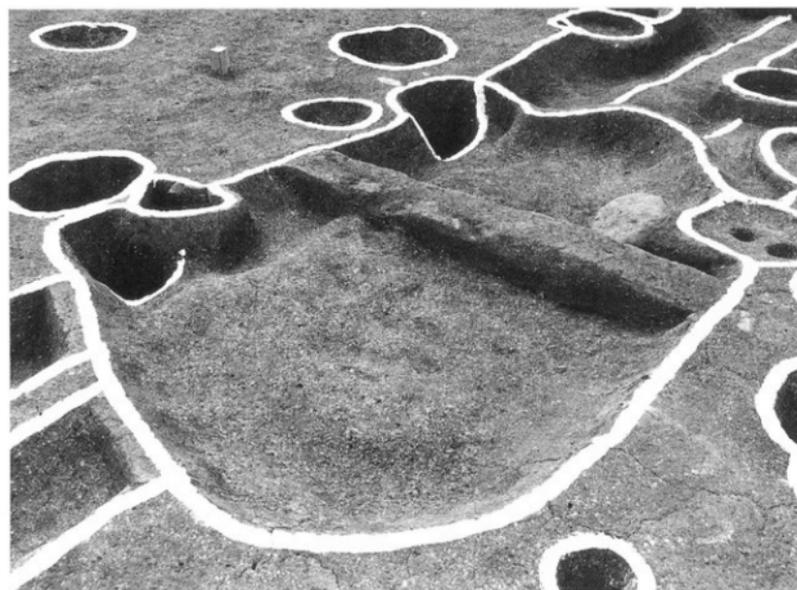
SD2 石垣部分(南西から)



SD10 (東から)



SK1 (南西から)



SK3 (東から)



S01



SP1 (北から)



SX2 遺物出土状況



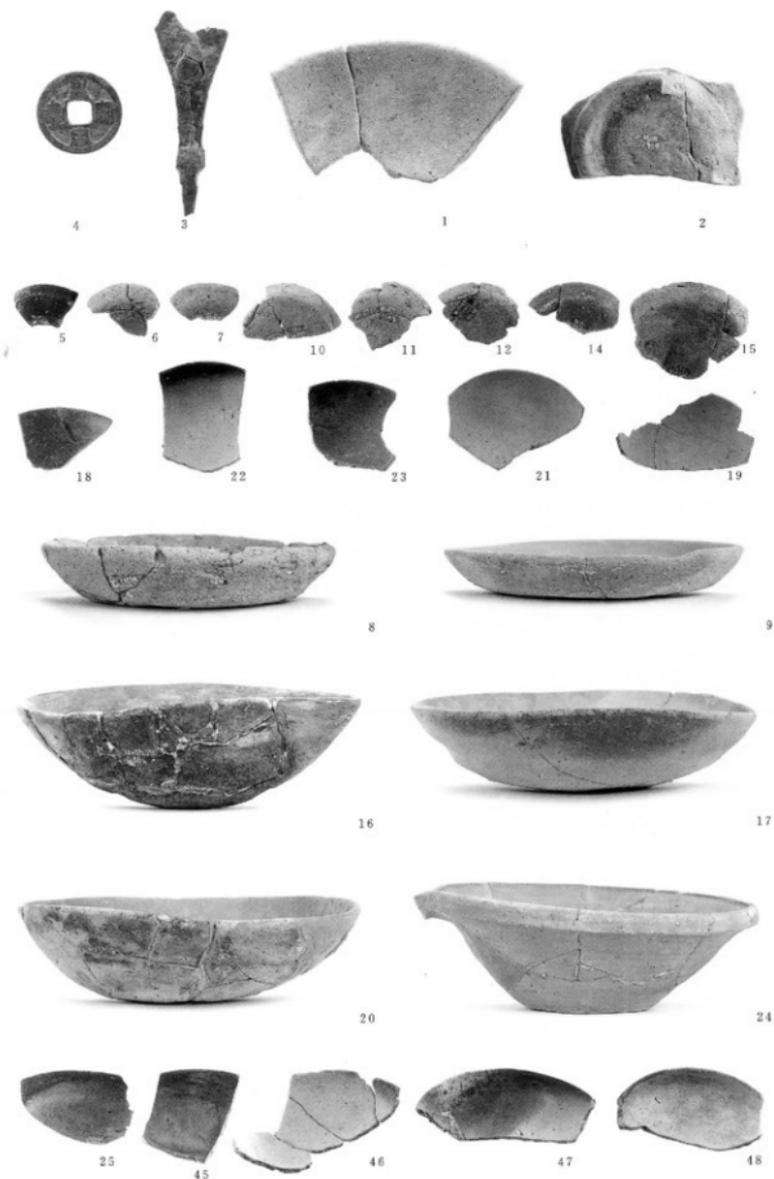
銅銭出土状況(包含層)



調査区全景(北から)



NV1 遺物出土状況(北から)



ICW96-1 包含層 (1~4),

ICW96-3 SB2 (5), SB4 (6~12, 14~24), SD1 (25), SE1 (45~48)



27



37



28



38



29



39



30



40



31



41



32



42



33



43



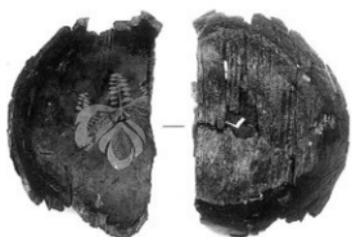
34



44



36



49



62



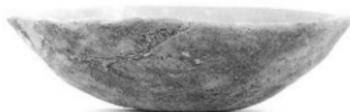
63



64



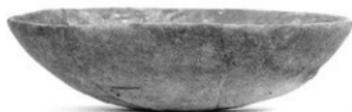
50



66



51



54



67



55



68



58



71

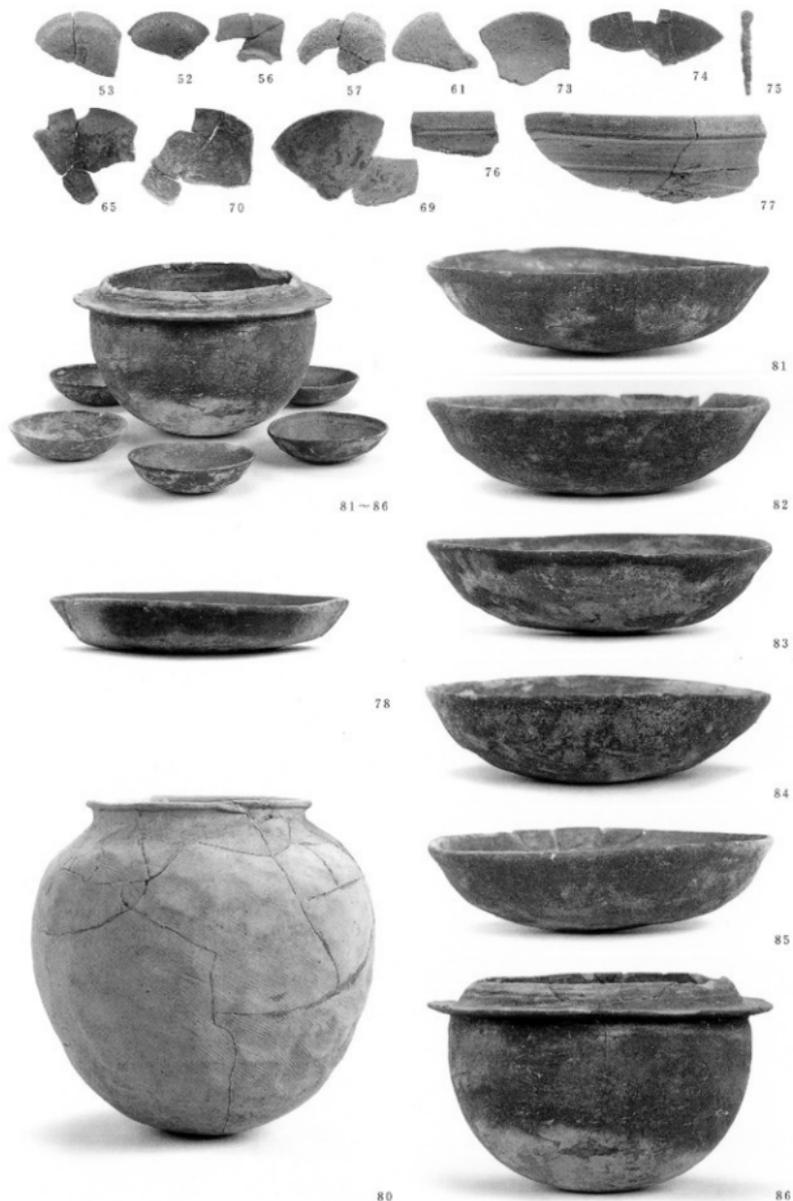


59

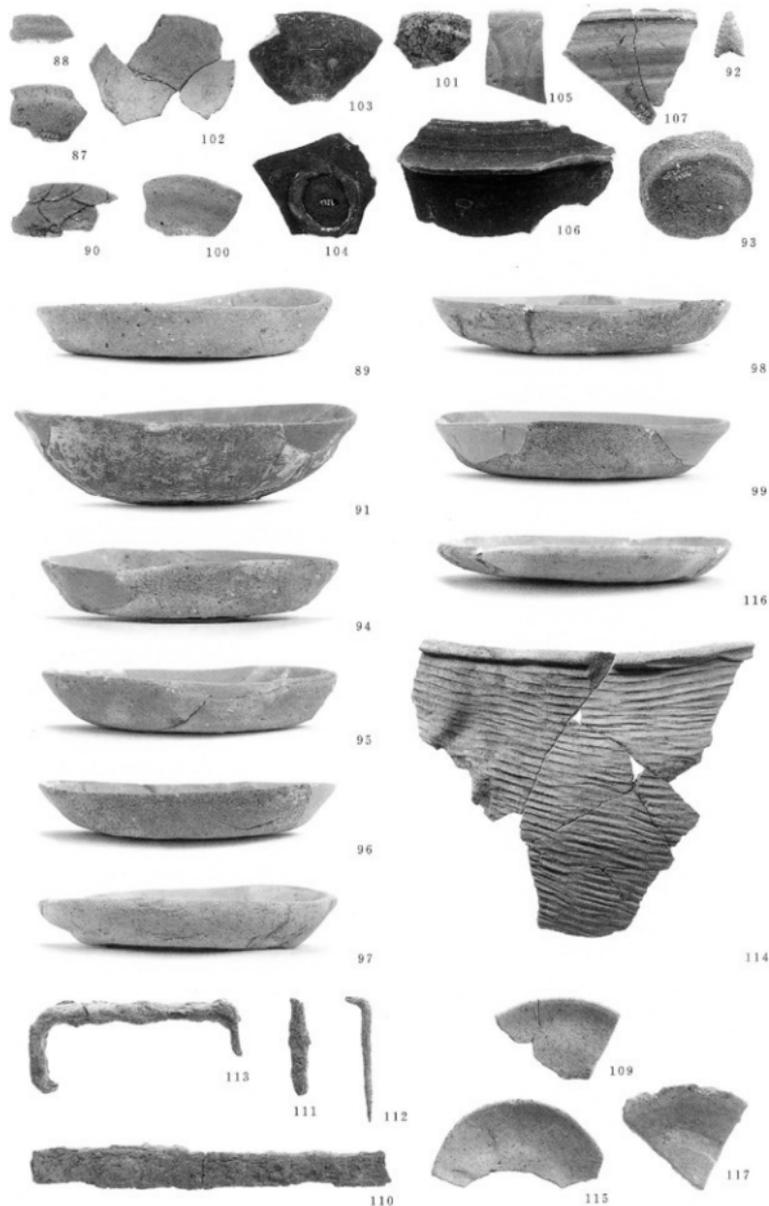


72

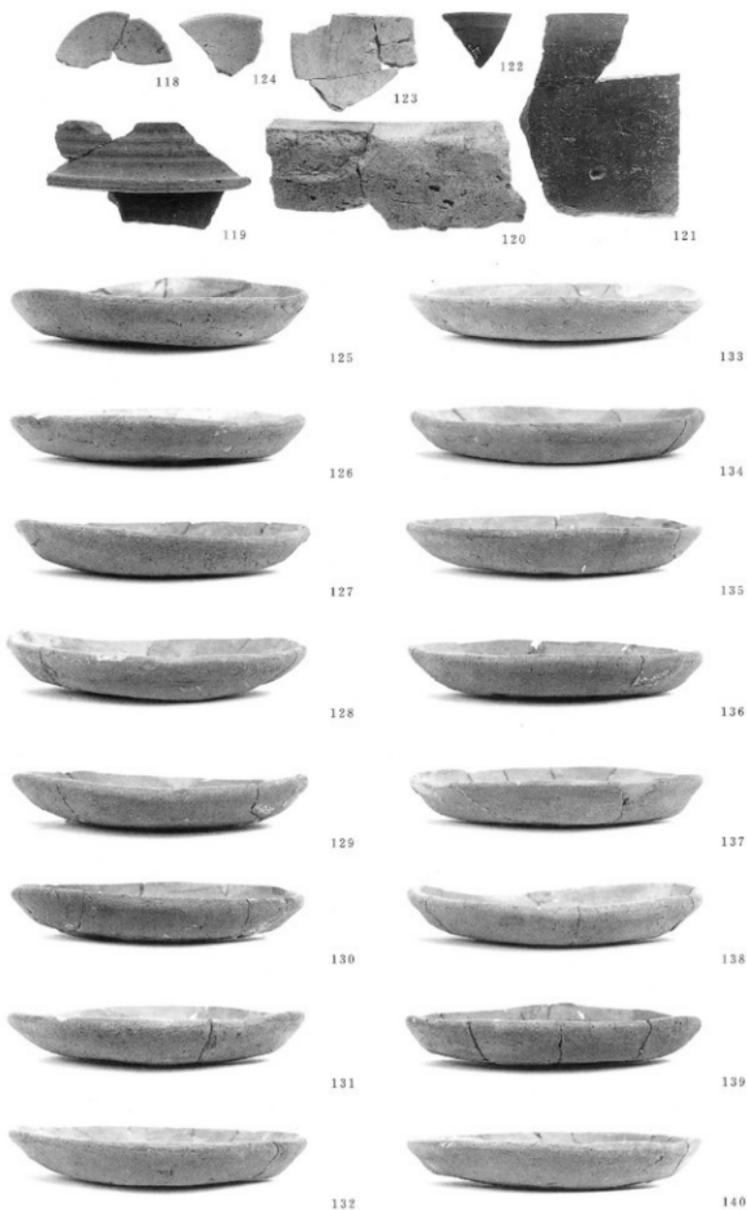
60



SK1 (53), SK2 (52), SK3 (56・57・61・65・69・70), SK4 (77), SK5 (75), SK6 (73), SK7 (74・76), SL1 (78・80), SO1 (81~86)



ICW96-3 SU1 (87~91), 包含層 (92~107),
 IZN97-1 SD1 (109), SD2 (110~117)



SK1 (118~121), SK2 (122), SK4 (123・124), SO1 (125~140)



141



146



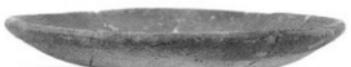
142



147



143



148



144



149



145



125~150



150



153



152



151



108



154



158



159



161

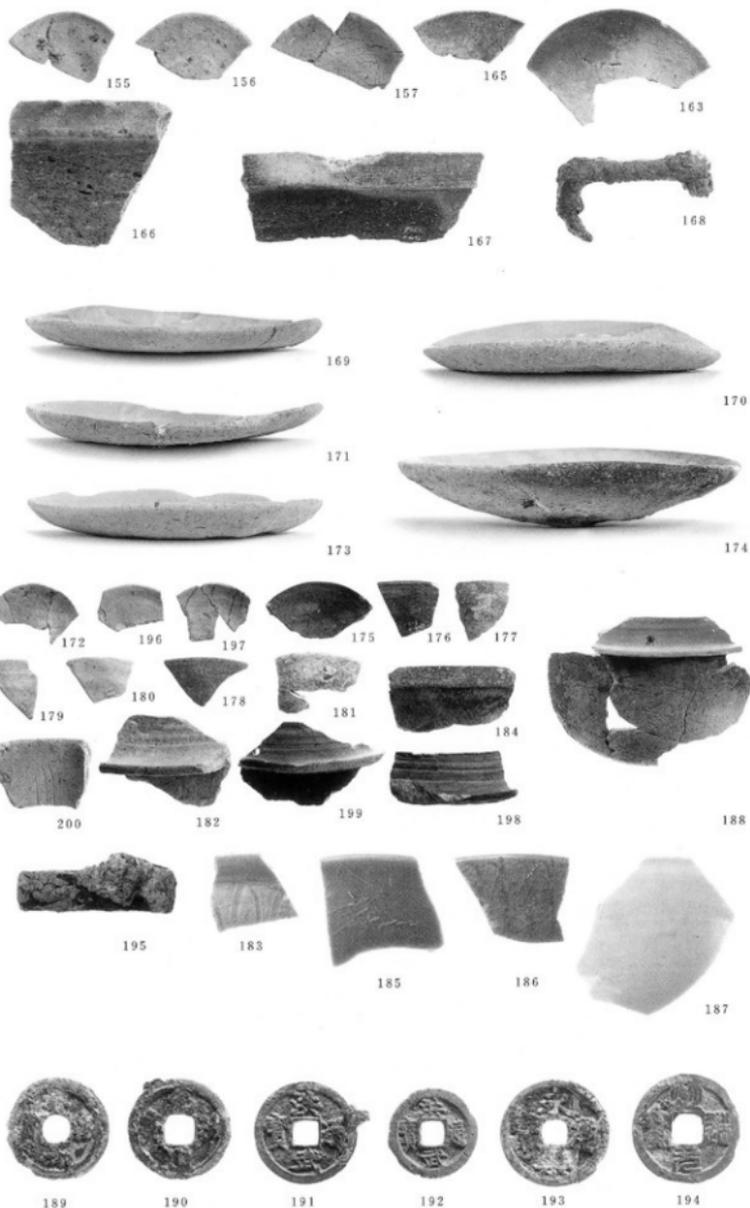


162

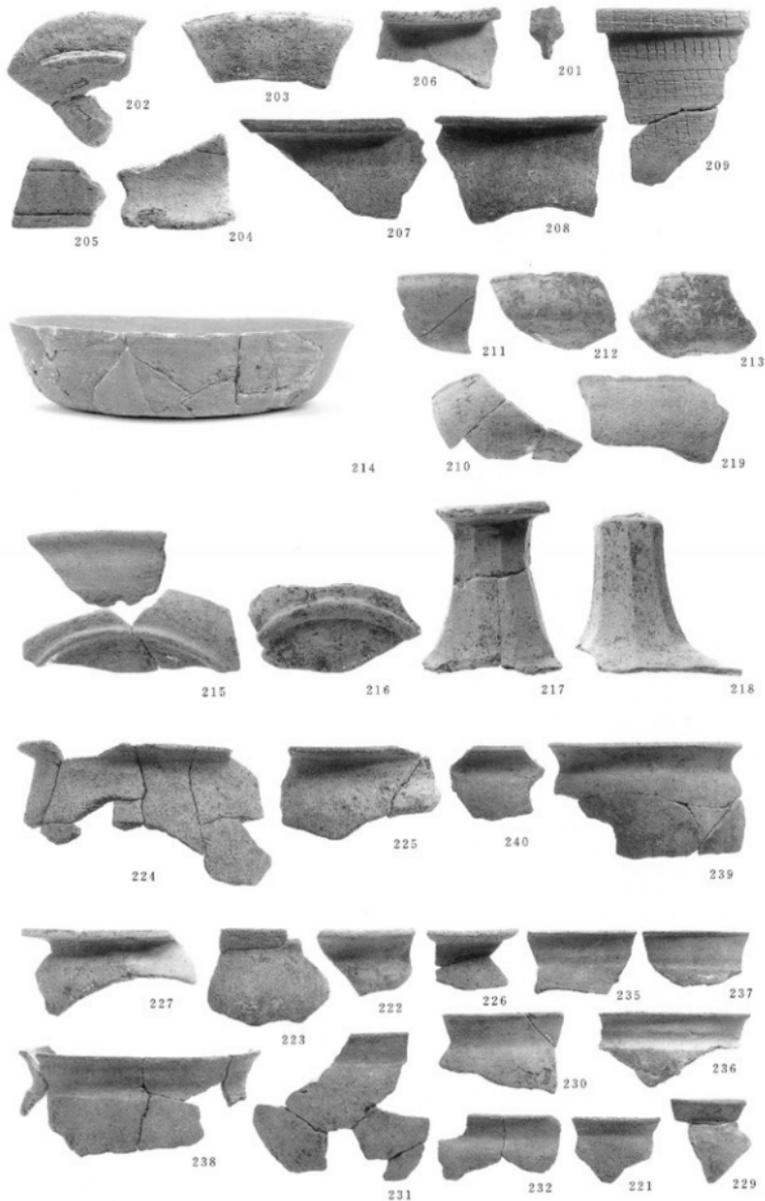


164

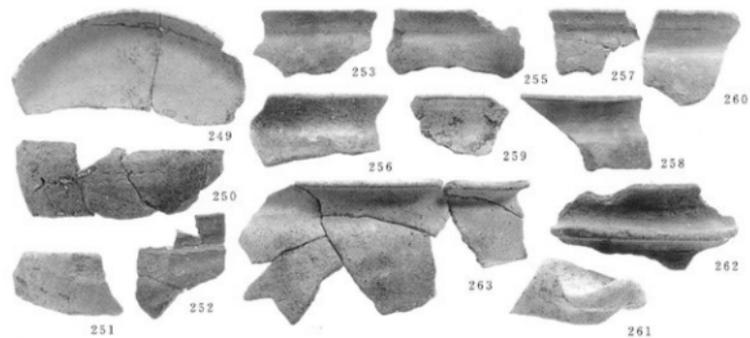
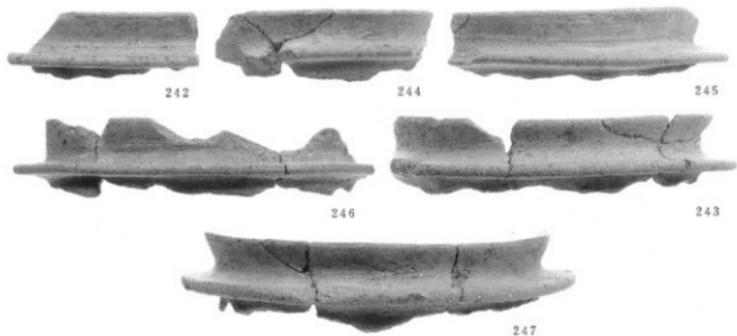
SB3 (108), SO1 (141~150), SP1 (152), SP2 (151), SP3 (153),
SX1 (154・158・159・161・162・164)



SX1 (155~157・163・165~168), SX2 (169~174), 包含層 (175~200)



NV1 (201・203・209～219・221～227・229～232・235～240), 包含層(202・204～208)



NV1 (241~247), 包含層 (248~263)



267



268



269



270



271



272



273



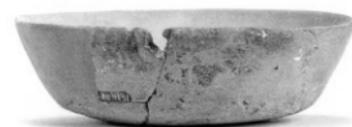
276



278



279



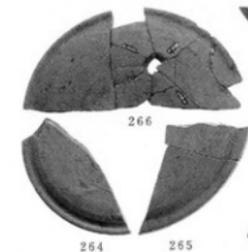
281



282



283



264

265

266



287



288



274



280



275



277



284



285



289



290



292



286



296



293



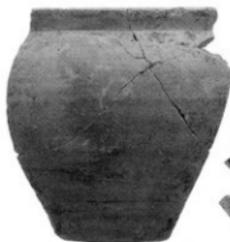
291



298



301



300



294

295

297

299

報告書抄録

ふりがな	いちちょうにしいせき いわげきたいせき しおのみやちょうみなみいせき
書名	市町西遺跡 岩瀬北遺跡 汐の宮町南遺跡
副書名	河内長野市遺跡調査会報 XX
シリーズ名	河内長野市遺跡調査会報
シリーズ番号	XX
編著者名	尾谷雅彦 鳥羽正剛 中尾智行 太田宏明
編集機関	河内長野市遺跡調査会
所在地	〒586-8501 大阪府河内長野市原町396-3 TEL 0721-53-1111
発行年月日	2000年2月29日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡					
市町西遺跡 (96-1調査)	大阪府河内長野市 市町948番地他	27216	府145 河119	34° 27' 48"	135° 34' 35"	1996.08.23) 1996.09.03	156m ²	宅地造成
市町西遺跡 (96-3調査)	大阪府河内長野市 市町945番地他	27216	府145 河119	34° 27' 49"	135° 34' 38"	1997.03.10) 1997.03.31	1000m ²	分譲住宅建設
岩瀬北遺跡 (97-1調査)	大阪府河内長野市 岩瀬79番地他	27216	府一 河138	34° 25' 07"	135° 34' 58"	1998.02.24) 1998.03.25	350m ²	国道371号 バイパス工事
汐の宮町南 遺跡 (95-1調査)	大阪府河内長野市 汐の宮町90番地	27216	府147 河123	34° 27' 50"	135° 34' 58"	1995.05.08) 1995.05.19	115m ²	共同住宅建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
市町西遺跡 (96-1調査)	集落	中世	-	-	-
市町西遺跡 (96-3調査)	集落	中世	掘立柱建物 井戸 土釜埋納遺構	土師質土器 瓦器 漆器	-
岩瀬北遺跡 (97-1調査)	集落	中世	掘立柱建物 溝 井戸 土釜埋納遺構	土師質土器 瓦質土器 銅銭	-
汐の宮町南 遺跡 (95-1調査)	散布地	弥生 奈良	自然流路	弥生土器 土師器 須恵器	-

河内長野市遺跡調査会報XX
市町西遺跡 岩瀬北遺跡 汐の宮町南遺跡

2000年2月29日発行

発 行 大阪府河内長野市原町396-3

河内長野市遺跡調査会

0721-53-1111

印 刷 榎中島弘文堂印刷所

